

天王遺跡

第1・2次発掘調査報告書

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第186集



2010

財団法人 山形県埋蔵文化財センター



て　ん　　の　う

天王遺跡

第1・2次発掘調査報告書

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第186集

平成22年

財団法人 山形県埋蔵文化財センター





調査前調査区全景（東から）



調査区全景（東から）



溝跡 S D 0269・0379完掘状況（北東から）



堀跡 S G 0935完掘状況（北東から）



周溝 S H2001発掘状況（南西から）



周溝 S H2002発掘状況（南東から）

219



152



220



S G0935 • 3216 • 2005出土板碑 (152 • 220 • 219)

序

本書は、財団法人山形県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した、天王遺跡の調査成果をまとめたものです。

天王遺跡は、山形県南東部に位置する南陽市にあります。南陽市は古くから赤湯温泉や果樹栽培が盛んなことで知られていますが、近年は道路網の整備や市街地の活性化が図られており、自然と調和した景観豊かな地方都市として発展しています。

この度、一般国道113号赤湯バイパス改築事業にかかわり、天王遺跡の発掘調査を実施しました。調査では、古墳時代前期に造営されたと推定される円墳の周濠が3基まとまって検出されました。また、館を囲む堀跡が検出され、調査の結果、中世の方形居館があった可能性の高いことが分かりました。方形居館の周りでは井戸跡や掘立柱建物跡が見つかり、集落が広がっていたことも判明しました。また、古墳時代の土師器や中世陶磁器・木製品などの遺物が出土しました。信仰に関係の深い板碑や木簡・柱状塔婆なども出土しました。これらのことから、この天王地区は長い間人々が様々な形で祈りを捧げた場所であったことなどが明らかになり、多大な成果を得ることができました。

埋蔵文化財は、祖先が長い歴史の中で創造し、育んできた貴重な国民的財産といえます。この祖先から伝えられた文化財を大切に保護するとともに、祖先の歴史を学び、子孫へと伝えていくことが、私たちに課せられた重要な責務と考えます。その意味で本書が文化財保護活動の啓蒙や普及、学術研究や教育活動などの一助となれば幸いです。

最後になりますが、調査において御支援、御協力いただいた関係者の皆様に心から感謝申し上げます。

平成22年3月

財団法人 山形県埋蔵文化財センター

理事長 山口常夫

凡　例

- 1 本書は、一般国道赤湯バイパス改築に係る「天王遺跡」の発掘調査報告書である。
- 2 既刊の年報、調査説明会資料などの内容に優先し、本書をもって本報告とする。
- 3 調査は国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所の委託により、財団法人山形県埋蔵文化財センターが実施した。
- 4 本書の執筆は、橋一彦・小林克也（第Ⅱ章）が担当し、柏倉俊夫、小笠原正道、鎌上勝則、安部実、阿部明彦、黒坂雅人、伊藤邦弘が監修した。
- 5 遺構図に付す座標値は、平面直角座標系第X系（世界測地系）により、高さは海拔高で表す。方位は座標北を表す。
- 6 本書で使用した遺構・遺物の分類記号は下記の通りである。

S K…土坑	S H…周溝	S D…溝跡	S E…井戸跡	S P…ピット
S G…河川跡	S X…性格不明遺構	S B…掘立柱建物跡	R W…登録木製品	R P…登録土器
- 7 遺構・遺物実測図の縮尺・網点の用法は各図に示した。遺物実測図中の拓本については、断面左側を内面、右側を外面とした。また、断面の黒ベタは須恵器を表す。
- 8 基本層序および遺構覆土の色調記載については、2002年版農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版基準土色帖」によった。
- 9 発掘調査、整理作業および本書を作成するにあたり、下記の方々から御協力と御助言をいただいた。（敬称略）

辻秀人 井上喜久夫 鈴木正貴 三上喜孝 飯村均

調査要項

遺跡名	天王遺跡		
遺跡番号	平成8年度登録		
所在地	山形県南陽市大字漆山字天王、塚原二		
調査委託者	国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所		
調査受託者	財団法人山形県埋蔵文化財センター		
受託期間	平成18年4月1日～平成22年3月31日		
現地調査	平成18年5月10日～11月17日 平成19年5月10日～10月19日		
調査担当者	平成18年度	調査課長	尾形與典
		調査研究主幹	長橋至
		専門調査研究員	伊藤邦弘
		調査研究員	橋一彦（調査主任）
		調査研究員	桑登
	平成19年度	調査課長	長橋至
		整理課長	野尻侃
		調査研究員	橋一彦（調査主任）
		調査員	吉田江美子
	平成20年度	整理課長	安部実
		課長補佐	黒坂雅人
		調査研究員	橋一彦（調査主任）
		調査員	小林克也
	平成21年度	整理課長	安部実
		課長補佐	黒坂雅人
		主任調査研究員	橋一彦（調査主任）
調査指導	山形県教育庁教育やまがた振興課文化財保護室（平成18～19年度） 山形県教育庁文化遺産課（平成20年度） 山形県教育庁文化財保護推進課（平成21年度）		
調査協力	南陽市教育委員会 山形県教育庁置賜教育事務所		
業務委託	基準点測量業務 日新技術コンサルタント 有限会社光南設計 地形・遺構測量（俯瞰撮影）業務 株式会社ワクニ 株式会社シン技術コンサル デジタルトレース業務 藤庄印刷株式会社 株式会社アサヒ印刷		

理化学分析業務 バリノ・サーヴェイ株式会社

株式会社加速器分析研究所

財團法人山梨文化財研究所

保存処理業務 株式会社吉田生物研究所

財團法人山梨文化財研究所

発掘作業員	秋場榮吉 齋藤公一 東海枝桂子 竹田國夫 吉田満	伊藤政晴 齋藤忠三 鈴木アイ子 武田幸子 渡部健一	井上芳子 境孝浩 鈴木康弘 土屋軍一 渡部勝	片倉富代 寒河江清次 高橋和夫 長谷部春雄 渡部光子	嘉藤行雄 佐藤久美子 高橋恵子 船山健 (五十音順)	菅野孝作 佐藤哲朗 高橋恒夫 皆川三枝子	木下明 佐藤美秋 高橋宏司 山本晴子
整理作業員	安達将行 菅沼奈保美	稻毛愛 鈴木アイ子	遠藤潤 鈴木照美	加藤矩男 中嶋美恵子	齋藤峰子 古内とき子	庄司あけ美 山田澄子	庄司彩奈 (五十音順)

目 次

I 調査の経緯	
1 調査に至る経緯	1
2 発掘調査の経過と方法	1
3 整理作業の経過	2
II 遺跡の位置と環境	
1 地理的環境	4
2 歴史的環境	4
III 調査成果	
1 概要	9
2 遺構	10
3 遺物	16
IV 理化学的分析	
1 瓦礫・種実・骨の分析	32
2 樹種・種実・骨の分析	42
3 土器の胎土分析	54
4 放射性炭素年代測定（AMS測定）	60
5 木製品の樹種同定	64
V 総括	73

報告書抄録	卷末
遺構配置図（A B C区）	付図1
遺構配置図（D区）	付図2

表

表1 遺跡分布図の道路名と種別・時代	7	表9 種実同定結果	45
表2 掘立柱建物跡一覧	20	表10 骨同定結果	47
表3 遺物（土器、石製品、金属製品、石器等）観察表(1)～(7)	21	表11 胎土分析試料一覧	54
表4 木製品観察表(1)～(4)	28	表12 蛍光X線分析結果	55
表5 瓦礫化石化の生態性区分および環境指標種群	34	表13 年代測定結果(1)	62
表6 瓦礫分析結果(1)(2)	35	表14 年代測定結果(2)	62
表7 種実同定結果	37	表15 天王遺跡出土木製品の樹種同定結果	67
表8 樹種同定結果	43	表16 天王遺跡樹種同定結果一覧(1)(2)	67

図 版

第1図 調査区概要図	2	第4図 D区基本層序	9
第2図 大グリッド設定図	3	第5図 主要瓦礫化石群集の層位分布	37
第3図 遺跡分布図	6	第6図 ウマの骨格	41

第7図	ウマ上顎骨・下顎骨の概念図	48	第45図	掘立柱建物跡S B3916	97
第8図	天王遺跡出土木材組織の光学顕微鏡写真(1)	50	第46図	掘立柱建物跡S B3917	98
第9図	天王遺跡出土木材組織の光学顕微鏡写真(2)	51	第47図	掘立柱建物跡S B3918	99
第10図	種実遺体	52	第48図	掘立柱建物跡S B3919	100
第11図	出土骨	53	第49図	掘立柱建物跡S B3920	101
第12図	天王遺跡出土試料の胎土組成散布図	57	第50図	掘立柱建物跡S B3921	102
第13図	平野古窯跡(南陽市・古代)出土須恵器の 胎土組成散布図	57	第51図	掘立柱建物跡S B3922	103
			第52図	掘立柱建物跡S B3923	104
第14図	蛇崩窯跡(長井市・古代)出土須恵器の 胎土組成散布図	58	第53図	掘立柱建物跡S B3924	105
第15図	平野山古窯跡(寒河江市・平安)および山形市南部の 古代窯跡出土試料の胎土組成散布図	58	第54図	掘立柱建物跡S B3924断面	106
第16図	二子沢古窯跡(天童市・平安)出土試料の 胎土組成散布図	59	第55図	掘立柱建物跡S B3925	107
第17図	万治ヶ沢遺跡(鶴岡市・古代)出土赤焼土器および荒沢窯 跡(鶴岡市・古代)出土須恵器の胎土組成散布図	59	第56図	掘立柱建物跡S B3926	108
第18図	暦年較正年代グラフ	63	第57図	掘立柱建物跡S B3927	109
第19図	天王遺跡出土木材組織の光学顕微鏡写真(1)	69	第58図	掘立柱建物跡S B3928	110
第20図	天王遺跡出土木材組織の光学顕微鏡写真(2)	70	第59図	掘立柱建物跡S B3929	111
第21図	天王遺跡出土木材組織の光学顕微鏡写真(3)	71	第60図	掘立柱建物跡S B3930	112
第22図	天王遺跡出土木材組織の光学顕微鏡写真(4)	72	第61図	掘立柱建物跡S B3931	113
第23図	道構配置図の割付	75	第62図	掘立柱建物跡S B3932	114
第24図	道構配置図1	76	第63図	掘立柱建物跡S B3933	115
第25図	道構配置図2	77	第64図	掘立柱建物跡S B3934	116
第26図	道構配置図3	78	第65図	掘立柱建物跡S B3935	117
第27図	道構配置図4	79	第66図	掘立柱建物跡S B3936	118
第28図	道構配置図5	80	第67図	掘立柱建物跡S B3937	119
第29図	道構配置図6	81	第68図	掘立柱建物跡S B3938	120
第30図	掘立柱建物跡S B3901	82	第69図	掘立柱建物跡S B3939	121
第31図	掘立柱建物跡S B3902	83	第70図	掘立柱建物跡S B3940	122
第32図	掘立柱建物跡S B3903	84	第71図	掘立柱建物跡S B3941	123
第33図	掘立柱建物跡S B3904	85	第72図	周溝SH2001	124
第34図	掘立柱建物跡S B3905	86	第73図	周溝SH2001断面	125
第35図	掘立柱建物跡S B3906	87	第74図	周溝SH2002	126
第36図	掘立柱建物跡S B3907	88	第75図	周溝SH2002断面	127
第37図	掘立柱建物跡S B3908	89	第76図	周溝SH2004	128
第38図	掘立柱建物跡S B3909	90	第77図	周溝SH2004断面	129
第39図	掘立柱建物跡S B3910	91	第78図	溝跡SD2003(1)	130
第40図	掘立柱建物跡S B3911	92	第79図	溝跡SD2003(2)	131
第41図	掘立柱建物跡S B3912	93	第80図	溝跡SD0269・0379	132
第42図	掘立柱建物跡S B3913	94	第81図	溝跡SD0269・0379断面(1)	133
第43図	掘立柱建物跡S B3914	95	第82図	溝跡SD0269・0379断面(2)	134
第44図	掘立柱建物跡S B3915	96	第83図	溝跡SD0269・0379断面(3)	135
			第84図	溝跡SD0122・0265・0268	136
			第85図	溝跡SD0387・0392・0389	137
			第86図	溝跡SD0681・0683・0884・0945	138
			第87図	溝跡SD3556	139

第88図	溝跡 S D3683・3801	140	第123図	土坑 S K0242～性格不明遺構 S X1409出土遺物	175
第89図	堀跡 S G0935	141	第124図	性格不明遺構 S X1432, 堀跡 S G0935出土遺物	176
第90図	堀跡 S G0935断面（1）	142	第125図	堀跡 S G0935B出土遺物	177
第91図	堀跡 S G0935断面（2）	143	第126図	堀跡 S G0935～B区北半出土遺物	178
第92図	堀跡 S G0935断面（3）	144	第127図	A～C区XO, 溝跡SD3556～堀跡SG3216出土遺物	179
第93図	堀跡 S G0935断面（4）	145	第128図	河川跡 S G2005出土板碑	180
第94図	堀跡 S G3216	146	第129図	堀跡 S G3216出土板碑	181
第95図	河川跡 S G2005	147	第130図	堀跡 S G3216～周溝 S H2002出土遺物	182
第96図	土坑 S K0001・0245・0320・0335・0336	148	第131図	周溝 S H2002～S H2004出土遺物	183
第97図	土坑 S K0373・0484・0751・0989・1220	149	第132図	周溝 S H2004～土坑 S K3524出土遺物	184
第98図	土坑 S K1353・1357・1364・1471・0369・0773・0900 ・0995・0996・1086	150	第133図	土坑 S K3564～D区トレンチ出土遺物	185
第99図	土坑 S K1156・1248・SP1249・SK1293・1296・1298 ・1306・0031	151	第134図	D区トレンチ～周溝 S H2001出土遺物	186
第100図	土坑 S K0309・0348・0376・0588・0746・0747	152	第135図	井戸跡 S E3006～遺構外出土遺物	187
第101図	土坑 S K0903・0904・0907・0923・2173	153	第136図	溝跡 S D0269・1362, 堀跡 S G0935, 井戸跡 S E0300 ・1349出土木製品	188
第102図	土坑 S K2583・2874・2892・2902・2972	154	第137図	井戸跡 S E1349, 土坑 S K0299・0751・1294	
第103図	土坑 S K3048・3095・3140・3151・3155・3230	155	第138図	出土木製品	189
第104図	土坑 S K3368・3395・3399・3493・3495	156	第139図	土坑 S K1357, ピット S P1221出土木製品	190
第105図	土坑 S K3566・3590・3600・3602・3605・3608 ・3611	157	第140図	溝跡 S D3688～井戸跡 S E3220出土木製品	191
第106図	土坑 S K3612・3626・3646・3669・3670, S P3671 ・S K3674・3701・3805	158	第141図	井戸跡 S E2567出土井戸枠（1）	193
第107図	土坑 S K3810・3814・3824	159	第142図	井戸跡 S E2567出土井戸枠（2）	194
第108図	井戸跡 S E0300・0313・1081・1349・1348・1416	160	第143図	井戸跡 S E3220出土井戸枠（1）	195
第109図	井戸跡 S E2121・2122・2457・2459・2556	161	第144図	井戸跡 S E3220出土井戸枠（2）	196
第110図	井戸跡 S E2558・2559・2560・2567	162	第145図	井戸跡 S E3220出土井戸枠（3）	197
第111図	井戸跡 S E2580・2690・2889・3006	163	第146図	井戸跡 S E3220出土井戸枠（4）	198
第112図	井戸跡 S E3220・3347・3704・3841	164	第147図	土坑 S K2583～S K3151出土木製品	199
第113図	ピット S P1221・1361・2268・3143・3256・3300 ・3628・3656	165	第148図	土坑 S K3399～S K3493出土木製品	200
第114図	ピット S P3663・3828・3834・3025・3037・3635 ・3199・3709	166	第149図	土坑 S K3493～S K3592出土木製品	201
第115図	性格不明遺構 S X1432・3001	167	第150図	土坑 S K3590・3600出土木製品	202
第116図	溝跡 S D0269出土遺物（1）	168	第151図	土坑 S K3602・3605出土木製品	203
第117図	溝跡 S D0269出土遺物（2）	169	第152図	土坑 S K3607・3608・3611出土木製品	204
第118図	溝跡 S D0269出土遺物（3）	170	第153図	土坑 S K3612・3626出土木製品	205
第119図	溝跡 S D0269・0379・0358出土遺物	171	第154図	土坑 S K3626・3669出土木製品	206
第120図	溝跡 S D0379・0389・0427・0836・0881出土遺物	172	第155図	土坑 S K3670・3674出土木製品	207
第121図	溝跡 S D0881・0883・0934・0945出土遺物	173	第156図	土坑 S K3674出土木製品	208
第122図	溝跡 S D0945～1422, 土坑 S K0001出土遺物	174	第157図	土坑 S K3674・3684・3810・3835・3840	
			第158図	出土木製品	209
			第159図	ピット S P3143・3161・3300・3566・3663	
				出土木製品	210
			第160図	ピット S P3663・3828, D区東側溝跡出土木製品	211

写真図版

卷頭写真

- 卷頭写真 1 調査前調査区全景・調査区全景
卷頭写真 2 溝跡 S D0269・0379、堀跡 S G0935完掘状況
卷頭写真 3 周溝 S H2001・2002完掘状況
卷頭写真 4 S G0935・3216・2005出土板碑 (152・220・219)
遺構写真
写真図版 1 D区全景
写真図版 2 周溝 S H2004完掘状況・A区西半部遺構検出状況
写真図版 3 A区遺構検出状況・A区完掘状況
写真図版 4 B区遺構検出状況・B区完掘状況
写真図版 5 A区拡張部遺構検出状況・A区拡張部完掘状況
写真図版 6 B区拡張部遺構検出状況・B区拡張部完掘状況
写真図版 7 C区、D区西半部遺構検出状況
写真図版 8 D区東端遺構検出状況・溝跡 S D0269、0379北壁土層断面
写真図版 9 堀跡 S G0935北壁、西壁土層断面
写真図版10 遺物出土状況・溝跡 S D0122、0265完掘状況
写真図版11 溝跡 S D0269・0358・0387・0392・0881・0883・0945
写真図版12 溝跡 S D1362・2003、周溝 S H2004、堀跡 S G0935,
河川跡 S G2005
- 写真図版13 周溝 S H2001・2002・2004、井戸跡0300・0313・1081・
1349・1348
- 写真図版14 井戸跡 S E1416・2121・2122・2457・2459・2556
・2558・2559
- 写真図版15 井戸跡 S E2560・2567・2580・2690・2889・3006・
3220・3347
- 写真図版16 井戸跡 S E3704・3841、土坑 S K0001・0245・0335・
0336・0751・0989・1353
- 写真図版17 土坑 S K1357・1364・1471・0369・1086・1156・1293・
1296
- 写真図版18 土坑 S K1298・1306・0031・0309・0348・0376・0588・
0747・0746
- 写真図版19 土坑 S K0903・0904・0923・2173・2583・2874・2892・
2902・3095
- 写真図版20 土坑 S K3151・3230・3368・3395・3399
- 写真図版21 土坑 S K3493・3495・3566・3590・3600・3602・3608・
3607
- 写真図版22 土坑 S K3611・3612・3626・3674・3701・3805・3810・
3669・3670、ピットSP3671
- 写真図版23 土坑 S K3814・3824、ピットSP1221・3142・3143・
3300・3628・3656・3663
- 写真図版24 ピットSP3828・3834・3025・3037・3199・3709,
性格不明遺構 S X1432・3001

遺物写真

- 写真図版25 青磁・白磁・青花・かわらけ (表)
写真図版26 青磁・白磁・青花・かわらけ (裏)
写真図版27 須恵器系陶器 (1)
写真図版28 須恵器系陶器 (2)
写真図版29 陶器系陶器 (1)
写真図版30 陶器系陶器 (2)
写真図版31 陶器系陶器 (3)
写真図版32 古瀬戸・ふいご (羽口)・古墳時代土師器 (1)
写真図版33 古墳時代土師器 (2)
写真図版34 古墳時代土師器 (3)・土師器 (1)
写真図版35 土師器 (2)・須恵器 (1)
写真図版36 須恵器 (2)
写真図版37 須恵器 (3)
写真図版38 須恵器 (4)
写真図版39 須恵器 (5)
写真図版40 須恵器 (6)・石製品 (1)
写真図版41 石製品 (2)
写真図版42 織文土器・弥生土器
写真図版43 石器
写真図版44 茶臼 (124)・須恵器系陶器 (54)
写真図版45 横瓶 (291)・(53)
写真図版46 古鏡・板碑 (219)
写真図版47 板碑 (152)
写真図版48 板碑 (220)
写真図版49 溝跡 S D0269出土木製品
写真図版50 溝跡 S D・堀跡 S G・土坑 S K出土木製品
写真図版51 土坑 S K出土木製品
写真図版52 ピット S P・溝跡 S D・堀跡 S G出土木製品
写真図版53 土坑 S K・井戸跡 S E出土木製品
写真図版54 井戸跡 S E出土井戸枠
写真図版55 井戸跡 S E・土坑 S K出土木製品
写真図版56 土坑 S K出土木製品 (1)
写真図版57 土坑 S K出土木製品 (2)
写真図版58 土坑 S K出土木製品 (3)
写真図版59 土坑 S K出土木製品 (4)
写真図版60 土坑 S K出土木製品 (5)
写真図版61 土坑 S K出土木製品 (6)
写真図版62 土坑 S K出土木製品 (7)
写真図版63 ピット S P・D区側溝跡出土木製品

I 調査の経緯

1 調査に至る経緯

国道113号は福島県相馬市と新潟市を結び、東北地方南部を横断する幹線国道である。このうち、山形県南陽市と新潟県荒川町までの区間では「新潟山形南部連絡道路」としての整備が計画され、バイパス建設による改築事業が進展中である。

山形県側では平成6年に、高畠町深沼から南陽市竹原に至る延長7.2kmの「赤湯バイパス」建設計画が示されたのを受けて、県教育委員会が平成7・8年に路線内の分布調査を実施し、埋蔵文化財の所在確認を行った。南陽市漆山地内に所在する天王遺跡はこの県教育委員会の調査によって確認され、平成8年度に遺物散布地として登録された遺跡である。その後、赤湯バイパス建設の進捗に合わせ、路線に係る遺跡の規模や遺存状態を把握するための試掘調査が平成13年から順次行われた。

平成17年11月24・25日の山形県教育委員会による試掘調査は、工事の施工範囲内に南北方向の試掘坑を9ヵ所（計291平方m）設けて行われた。試掘調査の結果、溝跡やピットが検出され、須恵器・土師器・中世陶器片が出土地した。

試掘調査の成果を受け、山形県教育委員会は、遺跡範囲内において道路建設工事を行う際には、事前に発掘調査による記録保存が必要であるとの判断に至った。調査対象面積は、工事の施工範囲と試掘調査の成果により13,000平方mとされ、調査区の東側半分（6,500平方m）を18年度に、西側半分（6,500平方m）を19年度に調査することとなった。

発掘調査開始前に、文化財保護法第92条に基づく「埋蔵文化財発掘調査の届出」を山形県教育委員会へ提出し、受理された後「埋蔵文化財の発掘調査について」の通知を受け取り、発掘調査に着手することとなった。発掘調査開始前には、国土交通省山形河川国道事務所や南陽市教育委員会など関係機関との事前打ち合わせを行い、調査期間や方法等の実施計画と現状での問題点等について協議している。

2 発掘調査の経過と方法

A 発掘調査の経過

発掘調査の方法は、事業用地の確認、調査区の設定、重機による表土除去、遺構検出のための面整理、面精査と進め、遺構プランの検出後に平面図作成・遺構登録などの過程を踏んだ。座標値と番号を登録した遺構は、順次半截等の掘り下げを実施して断面精査を行い、実測図作成等の諸記録を経た後に完掘した。完掘後の遺構平面図は業務委託により作成しており、第1次調査では写真解析で、2次調査時は空撮による遺構測量を実施している。調査の各段階では写真撮影を実施し、一連の作業が記録としてたどれるように配慮した。以下には発掘調査の経過について、年次ごとにその概要を記述する。

<第1次調査>

現地調査は、平成18年5月10日から11月17日まで（実働126日間）の日程で実施した。対象面積6,500平方mの調査区設定後、重機による表土除去を調査区西端部より開始した。調査区は西半部を南北方向に縱断する農道により東西に分割される。農道より東側をA区、西側をB区と設定した。なお、調査区の北端を東西方向に工事用道路が走っていたため、工事用道路を調査区南端に付け替えた後に調査区北端部分を調査した。この連れて調査した部分を「A区拡張部」「B区拡張部」と設定した。また、調査区を南北に走る農道部分も、農道を付け替えた後に調査し、その部分を「C区」と設定した。9月1日と10月27日に業務委託による、ラジオコントロールヘリコプターを用いた空中写真撮影を行い、調査区完掘状況の全景・鳥瞰写真などを撮影した。10月28日（土）に隣接する上大作裏遺跡と合同で調査説明会を開催し、11月17日にはすべての作業を終了して、現場を撤収した。

<第2次調査>

現地調査は、平成19年5月10日から10月19日まで（実働107日間）の日程で実施した。対象面積は6,500平方mで、第2次調査区全城をD区と設定した。調査は調査区

西側から順次進め、調査区の西端から20mまでの部分を7月下旬に先行して引き渡しを行った。それに伴いラジコンヘリによる空撮を7月26日と10月11日の2回行っている。1次調査と2次調査の方法の大きな違いは遺構断面の測量方法である。1次調査ではデジタルカメラの撮影による三次元解析図化により遺構の断面図を作成したが、2次調査ではすべて手取りで断面図を作成した。10月16日に調査説明会を開催し、10月19日にはすべての作業を終了して2カ年に及んだ発掘調査を終了した。

B グリッドの設定

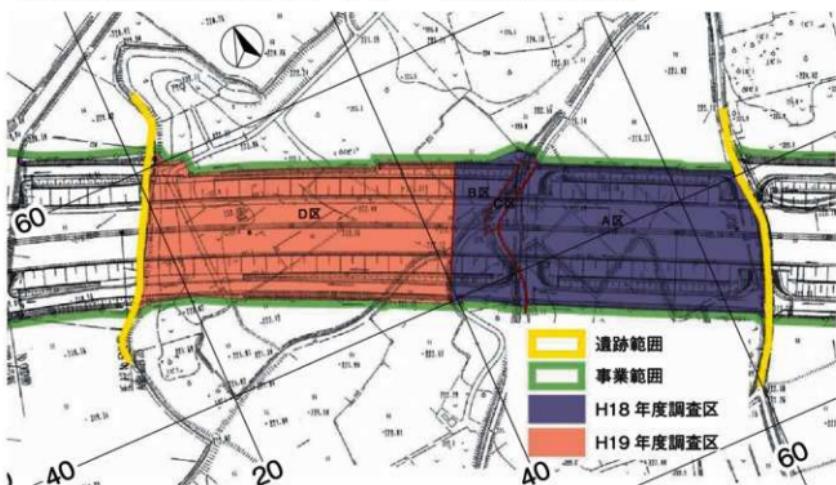
調査区内に設置したグリッドの方角は平面直角座標系第X系(世界測地系)に沿う。グリッドの名称は大グリッド(第2図参照)の名称「AB」の後に4桁の数値(例: A B3258)で表した。測量基準杭と水準点の移動にあたっては業者委託により、当工事を行っていた国道113号赤湯バイパスの3級基準点・KBMを与点とし、調査区内に公共座標杭を設置し、本遺跡のグリッド設定の基準杭とした。この公共座標のX Y軸を基準に座標計算を行い、そのデータを基に、調査区内に5m四方のグリッド網を設定した。各グリッドはX:-215600 Y:-63100を原点0とし、南から北に向かって1 2 3 ~と付した算用数字と西から東に向かって1 2 3 ~

と付した算用数字の組み合わせによって表示する。グリッド名の4桁の数値の上2桁が南北に増減するX軸の値を示し、下2桁が東西に増減するY軸の値を示す。グリッドが示す範囲は、X軸とY軸の交点の第一象限となる5m四方の25平方mである。

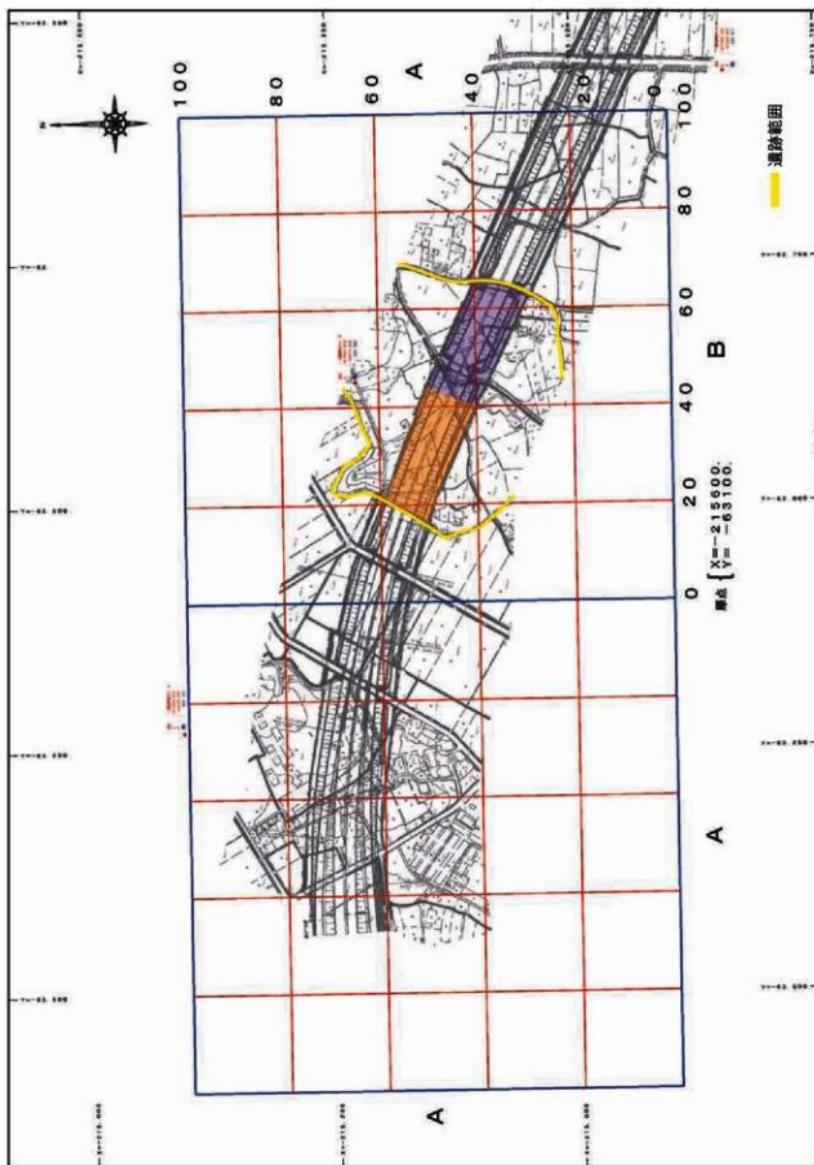
3 整理作業の経過

発掘調査を2カ年で行ったことから、報告書作成のための整理作業は3カ年にわたって実施した。出土遺物は洗浄作業後に注記を行った。次に復元、抽出、実測、拓本、デジタルトレース、写真撮影を行い、すべての作業が終了した後にコンテナへ収納した。

遺構の断面図・平面図及び遺物実測図は、業務委託によるデジタルトレースを行った後に編集した。出土木製品のうち重要なものについては業務委託による真空凍結乾燥法、井戸枠は高級アルコール法、その他は当センター内での糖アルコール含浸法による保存処理を施した。また業務委託による理化学分析では、土器や石製品の放射性炭素年代測定、土器の胎土分析、珪藻分析、種実分析、樹種同定、骨同定を行った。分析結果は第IV章に掲載した。出土遺物は、報告書に掲載したものと別にして収納した。なお、報告書掲載遺物については図版番号を注記に追加している。



第1図 調査区概要図 (1/2000)



第2図 大グリッド設定図 (1/5000)

II 遺跡の位置と環境

1 地理的環境

天王（てんのう）遺跡は、山形県置賜地方の北部、南陽市に位置し、同市内の漆山地区の字天王に所在する。

南陽市がある置賜地方は、ほぼ南北に走る東側の奥羽山脈と、西側の飯豊山地や朝日山地によって縁どられ、米沢・長井・小国の中三盆地に分けられる。南陽市はその中の米沢盆地の北縁にある。

置賜盆地の北半では、北は吉野川や織機川、上無川、東は屋代川、南は最上川が流れ、葉脈状に盆地内を流れゆき、最上川に合流して長井方面に北進してゆく。遺跡の立地する漆山地区は吉野川、織機川が上流地带の山地を浸食して運搬し、堆積した扇状地が複合して形成された宮内扇状地上に立地し、天王遺跡はその扇状地の中央を流れる上無川の自然堤防上の微高地に所在している。

また周辺では、宮内扇状地に隣接して、大谷地低湿地と呼ばれる湿地帯も形成されている。大谷地低湿地は米沢盆地の北東部に形成され、その広さは1000ヘクタールにも及ぶ。現在では湖の名残として白竜湖が残っている。

置賜地方の気候は内陸性気候を示し、年間降水量は1,500mm前後を測る。冬は寒冷で積雪が多く、山間部では数mに及ぶことも多い。植生帶を見てみると、本遺跡の北側に位置する竜樹山や経塚山の現在の植生は、オクチヨウジザクラ・コナラ群集やオオバクロモジ・ミズナラ群集、アカマツ群落などが卓越して育成している。それらの樹木はブナクラス城自然構造の二次林であり、それらの山々の自然植生は、ブナ林であった事が考えられる。

遺跡は宮内扇状地の扇尖部に位置し、標高は約222mを測る。扇状地の扇端部に向かって放射・帯状に広がる自然堤防は、その開析過程における河川の激しい流路変動を物語るものであり、遺跡はそうした織機川の旧河道とみられる自然堤防上の微高地に立地している。周辺は湿地性の河間低地や後背湿地に囲まれており、現況は旧河道にあたる凹地が水田、その両岸の自然堤防にあたる微高地が畠地や果樹園となっている。また遺跡の北側では微高地が低地に向かって半島状に張り出しており、そ

こに地元の方が「テンノウさま」と呼ぶ祠が存在する。遺跡名の由来にもなっている。この「天王」という字名は、後述する円墳の存在と密接な関わりがあると考える。また、遺跡の北東の大仏集落には山形県指定文化財の「文和三年阿弥陀板碑」などの板碑も分布している。

2 歴史的環境

山形県遺跡地図(山形県教育委員会2004)によれば、南陽市には本遺跡を含めて260箇所ほどの遺跡が登録されている。赤湯バイパスにかかる遺跡分布調査でも新規登録の遺跡があり、さらに増加していくと見られる。

以下に、周辺遺跡に関して時代ごとに概観し、この地域の歴史的背景について考えることとする。

A 繩文時代

縄文時代の遺跡は、山間部から谷地田周辺まで広く分布している。織機川上流に位置する大野平遺跡では、早期中葉・後葉と前期末葉の堅穴住居跡が4棟検出されている。関東の戸戸下層式に併行する沈線文土器は「須刈田式」として、山形県の早期における標式土器となっている。

白竜湖に臨む山麓斜面上の月ノ木B遺跡でも、早期中葉から前期前葉にかけての土器が多量に出土している。

高畠町の押出遺跡は前期中葉の低湿地集落で、白竜湖周辺に広がる湿地帯「大谷地」の南西端に位置する。良好な保存状態を有する泥炭層からは、打込柱平地式住居、彩漆土器、クッキー状炭化物など全国的にも貴重な発見がなされた。

また、百刈田遺跡の第1・2次調査では、中期後葉の複式炉を有する堅穴住居跡が6棟検出されている。

B 弥生時代

弥生時代の遺跡は、沢田遺跡・荻生田遺跡・掛在家遺跡・東高棚遺跡・百刈田遺跡・庚塙遺跡などがあり、吉野川や織機川による宮内扇状地に出現する。

百刈田遺跡の第3次調査では、墓跡とみられる十数基

の遺構に伴い、中期後業の土器がまとまって出土し、
庚塙遺跡では後期の竪穴住居跡が1棟、秋生田遺跡から
は中期後業と見られる石包丁が見つかっている。自然堤防を村の拠点として低湿地での稲作経営を行ったであ
ろう事が窺える。

C 古墳時代

この時代で特筆すべきは、4世紀後半に築かれた福荷森古墳である。この古墳は南陽市長岡に所在し、全長96m、後円部の径62m、前方部の長さ34mの規模を有する県内最大の前方後円墳である。

宮内扇状地では、経塚山・竜樹山などの丘陵部に、経塚山古墳群・天王山古墳群・竜樹山古墳群・梨郷古墳群など、多くの古墳が築かれている。また、近年の開発にかかる緊急発掘調査によって、宮内扇状地の平野部においても周溝墓・古墳群の存在が明らかになってきている。大塚遺跡では4世紀後半の方形(円形)周溝が15基、植木塙一遺跡では5世紀中頃の円墳周濠が1基、中落合遺跡からも方形周溝が1基検出されている。

D 奈良・平安時代

宮内扇状地内では、庚塙遺跡・檜原遺跡・沢田遺跡・

西中上遺跡・植木塙一遺跡・中落合遺跡など、多くの遺跡が確認されている。律令制下の南陽市域は置賜郷と呼ばれ、「郡山」という地名から沖郷地区には8世紀末から9世紀末にかけての古代置賜郡衙があったと考えられている。中落合遺跡からは南北軸に沿って計画的に配置された掘立柱建物群と区画施設が検出され、矢ノ目館跡遺跡では畦畔や水路とみられる大型遺構が検出されている。

また周辺には、経塚山の麓に梨郷平野古窯跡、隣の丘陵である今泉山に蛇崩窯跡・加賀塙遺跡・今泉金山遺跡などの奈良・平安時代の窯跡が点在する。

E 中世・近世

単郭式方形館を呈する鶴の木館跡をはじめ、南陽市では62箇所もの城館跡が確認されている。

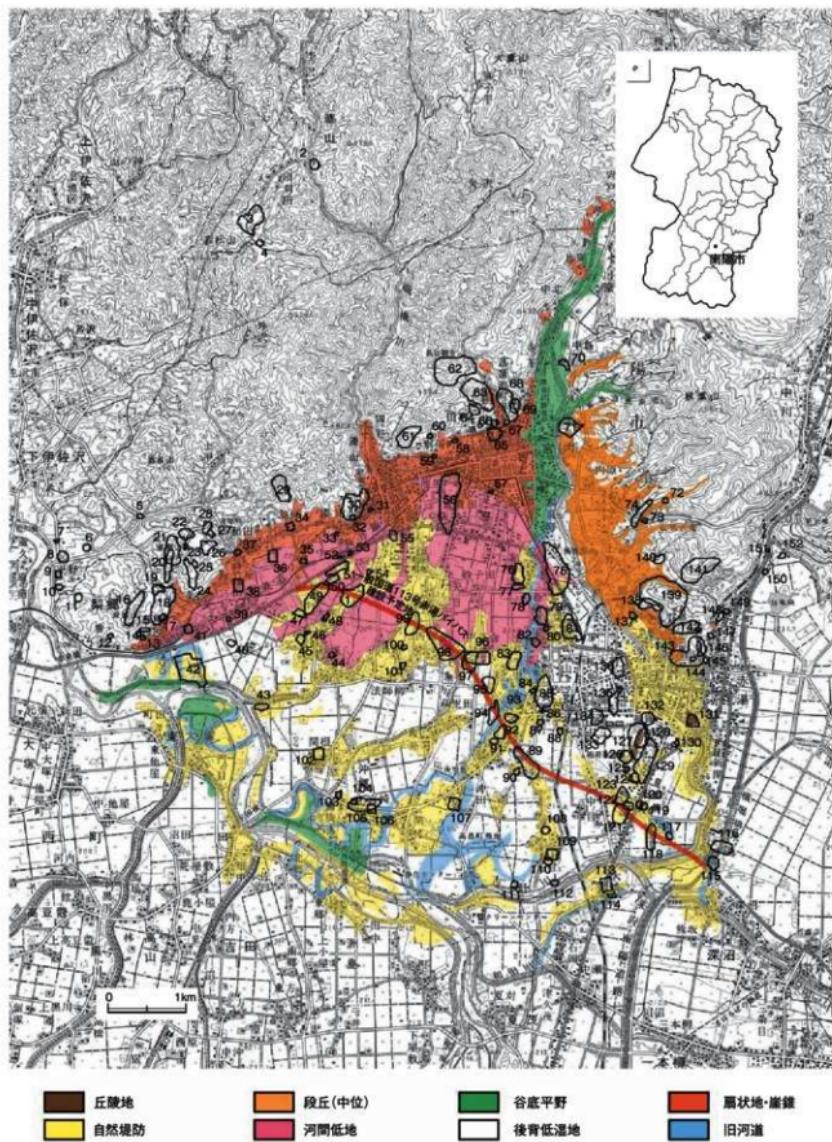
若狭郷屋敷・中屋敷・中落合館などは旧吉野川の両岸に、畿内城館・沖田館・宮崎館・植木塙一遺跡などは扇央部の最上川に隣接して位置している。

植木塙一遺跡では宮崎館の一部とみられる水掘・土塁跡が検出され、上杉藩主が鷹狩り時の休み処とした「御殿跡」とも伝えられている。

参考文献

- 山形県 1983 「土地分類基本調査 赤湯・上山 5万分の1」
- 南陽市史編さん委員会 1987 「南陽市史 考古資料編」
- 南陽市史編さん委員会 1990 「南陽市史 上巻」
- 山形県教育委員会 1995 「山形県中世城館遺跡調査報告書 第1集(置賜地域)」
- 南陽市教育委員会 1984 「郡山 矢ノ目館跡遺跡」(南陽市埋蔵文化財調査報告書第1集)
- 南陽市教育委員会 1989 「縄荷森古墳」(南陽市埋蔵文化財調査報告書第4集)
- 山形県教育委員会 1990 「押出遺跡発掘調査報告書」(山形県埋蔵文化財調査報告書第150集)
- 財團法人山形県埋蔵文化財センター 1998 「植木塙一遺跡発掘調査報告書」(山形県埋蔵文化財センター調査報告書第59集)
- 財團法人山形県埋蔵文化財センター 2006 「鶴の木館跡発掘調査報告書」(山形県埋蔵文化財センター調査報告書第150集)
- 財團法人山形県埋蔵文化財センター 2007 「大塚遺跡 西中上遺跡発掘調査報告書」(山形県埋蔵文化財センター調査報告書第158集)
- 財團法人山形県埋蔵文化財センター 2007 「庚塙遺跡発掘調査報告書」(山形県埋蔵文化財センター調査報告書第161集)
- 財團法人山形県埋蔵文化財センター 2007 「檜原遺跡発掘調査報告書」(山形県埋蔵文化財センター調査報告書第165集)
- 財團法人山形県埋蔵文化財センター 2008 「中落合遺跡発掘調査報告書」(山形県埋蔵文化財センター調査報告書第168集)
- 財團法人山形県埋蔵文化財センター 2006 「蛇崩窯跡発掘調査報告書」(山形県埋蔵文化財センター調査報告書第155集)

II 遺跡の位置と環境



第3図 遺跡分布図（国土地理院発行5万分の1地形図「赤湯」に土地分類基本調査「赤湯・上山」の地形分類図を重ねて80%に縮小し、宮内扇状地を中心に一部修正を加えて記載した。）

表1 遺跡分布図の遺跡名と種別・時代

番号	遺跡名	種別	時代	番号	遺跡名	種別	時代
1	天王	墓跡・集落跡	古墳・中世	51	高山原	集落跡	縄文(前期)・平安
2	備後館	船跡		52	四百刈	散布地	縄文
3	大野平	集落跡	縄文(早・前・中期)	53	大根在家	散布地	平安
4	小須刈田	散布地	縄文(早・前・中期)	54	大仏	散布地	縄文(後期)
5	長峰	散布地	縄文	55	東高堰	散布地	弥生(中期)・平安
6	平野C	散布地	縄文	56	富貴田	集落跡	縄文・奈良
7	平野B	散布地	縄文	57	清水	散布地	縄文・平安
8	平野A	集落跡	縄文	58	別所A	散布地	平安
9	中島平	集落跡	縄文(前期)	59	別所B	散布地	縄文
10	梨郷古墳群	古墳群	古墳(終末期)	60	別所山経塚	経塚	平安
11	平野古窯	古窯跡	奈良・平安	61	別所館	船跡	中世
12	經塚山南	散布地	縄文	62	北館	船跡	中世
13	小山B	散布地	縄文(晚期)	63	宮沢城	船・城船跡	中世
14	小山西	散布地	平安	64	宮内南館	船跡	中世
15	小山A	散布地	縄文	65	宮内小学校敷地内	集落跡	縄文(中期)・平安
16	經塚山古墳群	古墳群	古墳	66	宮内野獣大社敷地内	散布地	縄文(中・後期)・平安
17	宮城墳墓	火葬墳墓	平安	67	久保	集落跡	縄文(中期)
18	梨郷上館	船・城船跡	中世	68	慶海山館	船跡	中世
19	福荷山古墳群	古墳群	古墳	69	双松公園内	散布地	縄文
20	竜樹山古墳群	古墳群	古墳	70	平船	船跡	中世
21	龍樹山館	船跡・哨望	中世	71	丸山館	船跡	中世
22	霧煙	集落跡	縄文・奈良・平安	72	山居沢山A	散布地	平安
23	雨沼B	集落跡	縄文(後・晚期)・奈良・平安	73	山居沢山B	散布地	平安
24	天王山古墳群	古墳群	古墳	74	蒲生田古墳群	古墳群	古墳(終末期)
25	ヌグッポ	集落跡	縄文(早・前期)	75	鰐音堂	散布地	縄文・平安
26	石ヶ窪A	集落跡	縄文(前・中期)・奈良・平安	76	蒲生田館	船跡	中世
27	金山	散布地	縄文(早期)	77	南館船ノ内	散布地	縄文・奈良・平安
28	牛ヶ首A	集落跡	平安～中世	78	当時作	散布地	縄文・奈良・平安
29	赤松山館	船跡	中世	79	若狭郷屋敷	船跡	中世
30	漆山館	船跡	中世	80	中屋敷	散布地	奈良・平安
31	漆山	集落跡	縄文(中期)	81	唐越	散布地・集落跡	縄文(中期)・奈良・平安
32	漆山(学校下)	集落跡	縄文(中・後期)	82	西田	散布地	平安
33	前田	散布地	縄文	83	萩生田	集落跡・散布堆	弥生・奈良
34	片岸館	船跡	中世	84	鳥賀	集落跡	古墳～奈良・平安
35	西高田	散布地	平安	85	沢田	集落跡	弥生・古墳(中期)・奈良・平安
36	梨郷新館	船跡	中世	86	郡山中頃	散布地	奈良・平安
37	羽黒堂	散布地	縄文	87	沢口	集落跡	奈良・平安
38	削田館	船跡	中世	88	間々ノ上	散布地	奈良
39	藏庭	散布地	奈良	89	百刈田	集落跡・墓跡	縄文(中期)・弥生(中期)他
40	松木塙	散布地	平安	90	前小屋	散布地	縄文
41	梨郷小館	船跡	中世	91	将監屋敷	散布地	奈良・平安
42	梨郷南館	船跡	中世	92	西中上	集落跡	奈良・平安
43	北徳田	散布地	縄文	93	古屋敷	散布地	平安
44	下八ツ口	散布地	縄文	94	大塚	集落跡・墓跡	縄文・古墳・奈良・平安
45	塙釜前	散布地	縄文(晚期)・弥生	95	梅ノ木	散布地	奈良・平安
46	塙釜	集落跡	縄文(中期)	96	中落合館	船跡	中世
47	清水ノ下	散布地	古墳(後期)	97	中落合	集落跡	古墳・奈良・平安・近世
48	中野	散布地	縄文(中期)・平安	98	榎原	集落跡	奈良・平安・中世・近世
49	上大作裏	集落跡	縄文(早・前中期)・弥生(中期)他	99	庚塙	集落跡	縄文・弥生(後期)・古墳・他
50	掛在家	集落跡	縄文(前期)・弥生・古墳(後期)他	100	北前	散布地	縄文(晚期)

II 通路の位置と環境

番号	遺跡名	種 別	時 代	番号	遺跡名	種 別	時 代
101	長瀬館	館跡	中世	127	長瀬山	集落跡	旧～中石器・縄文(中期)・古墳
102	間根館	館跡	中世	128	長瀬館	館跡	
103	森横A館	館跡	中世	129	長瀬東	散布地	中世
104	森横B館	館跡	中世	130	太子堂	散布地	平安
105	植木場一	墓跡・集落跡・館跡	古墳・平安・中世・近世	131	門塚館	館跡	中世
106	宮崎館	館跡	中世	132	李の木	包蔵地	縄文・平安
107	沖田館	館跡	中世	133	早稲田	散布地	奈良
108	大屋敷	散布地	平安	134	矢の日館	館跡	平安?・中世
109	戸内城前	館跡	中世	135	東六角	集落跡	縄文(中期)・平安
110	戸内田	散布地	平安	136	諏訪前	散布地・集落跡	縄文(中期)・古墳(前期)他
111	大野原館	館跡	中世	137	横沢	散布地	縄文(中・後期)・奈良
112	庭田尻	散布地	平安	138	二色桙古墳群	古墳群	古墳(終末期)
113	大瀬城	城館跡	中世	139	二色桙城	城館跡	中世
114	御殿跡	館跡	中世	140	雅沢山古墳群	古墳群	古墳(終末期)
115	舟入	散布地	縄文・平安	141	上野山古墳群	散布地・古墳群	弥生・古墳(終末期)
116	押出	集落跡	縄文(前期)	142	中野山館	館跡	中世
117	東畠B	散布地	平安	143	上野山館	城砦・砦	中世
118	東畠A	集落跡	奈良・平安・近世	144	鳥帽子山古墳	古墳	古墳(終末期)
119	水上	散布地	奈良・平安	145	鳥帽子山經塚	經塚	平安
120	熊の前館	館跡	中世	146	上ノ山	散布地	縄文
121	禿の木館	集落跡・城部跡	古墳・平安・中世・近世	147	稻荷前	散布地	縄文(前期)
122	内城館	館跡	中世	148	北町	散布地	縄文(前期)
123	中ノ目下	散布地	奈良・平安	149	夷平	散布地	縄文(晚期)・中世?
124	長瀬南森	散布地	縄文(中期)・古墳(前・中期)	150	月ノ木B	集落跡	縄文(早～中期)・弥生(中期)
125	長瀬西田	散布地	縄文(中期)	151	月ノ木A	散布地	平安
126	稲荷森古墳	散布地・古墳	旧石器・縄文(中期)・古墳(前期)	152	十分の一山	集落跡	縄文(中期)

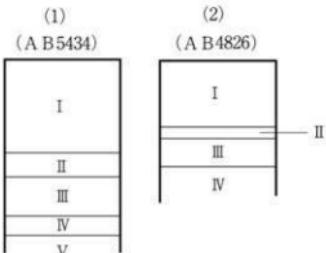
III 調査成果

1 概要

A 基本層序

調査区壁土層図は第81図 S D0269,0379の断面図(a-a')と第90図 S G0935の断面図(a-a')と第92図 S G0935の断面図(e-e')および下記第4図にD区の基本層序を示した。

表土は主に黒色粘質土や黒褐色砂質シルトなどである。地山はS G0935の断面図(a-a')と(e-e')がⅢ層目で、その他の断面図はⅣ層目からになっている。遺構検出面は、それぞれの地山の層の直上とした。地山はいずれも細砂あるいは砂質シルトなどで、本遺跡のすぐ近くの集落の字名である「砂塚」はこの地山の土質が語源に



(1) A B5434 付近

- I 耕作土 10YR2/1 黒色粘質土。砂粒 (2~3mm大) 多量混入。
- II 耕作土 10YR2/3 黑褐色粘土。砂粒 (2~3mm) 中量混入。
- III 10YR2/1 黒色粘質土。
- IV 10YR3/3 黑褐色砂質土。地山。
- V 10YR6/2 灰黒褐色砂質シルト。地山。

(2) A B4826 付近

- I 耕作土 10YR2/1 黒色粘質土。砂粒 (2~3mm大) 多量混入。
- II 耕作土 10YR4/3 にびい黄褐色粘質土。I の土混入。粉砂 (2~3mm大) 多量混入。
- III 10YR2/1 黒色砂質シルト。
- IV 10YR4/4 黄褐色細砂。地山。

なっていると考えられる。調査区の地形はほぼ水平で、遺構検出を行った地山面の標高は222.6m前後である。

B 遺構と遺物の分布

古墳時代の円墳の周濠が3基まとめてD区から検出された。古墳時代前期の平場に築かれた古墳群の例は近畿では珍しい。これらを円形周溝墓とすべきという意見もあったが、後述の通り、やはり墳丘が盛られた古墳群であったと考える。これらの周溝からは数多くの古墳時代の埴輪式の土師器が弥生土器とともに出土している。

B区とD区にまたがり、堀跡の一部が検出された。出土遺物から中世の堀跡であることがわかった。明らかに人為的に掘られたと見られる堀跡で、方形居館の存在が予想される。詳しくは後述に回す。この堀跡からは青磁・白磁などの輸入磁器や瓷器系陶器、須恵器系陶器などの中世陶磁器が多く出土している。また、特徴的な板碑が出土しているのも興味深い。また、大きな2条の溝跡が、A区を東西に二分する。この溝跡からは、奈良・平安時代と思われる古代の土師器や須恵器と共に中世陶磁器が数多く出土している。柱穴跡も多く検出され、掘立柱建物41棟を組み上げることができたが、本来はさらに多くの掘立柱建物、掘立柱列が存在していたと推測される。その他、井戸跡23基、土坑66基以上、性格不明遺構などが検出された。

2年間の調査の結果、堀を伴う方形居館や3基の円墳の周濠が検出されたが、いずれも調査区の外側（北側）に統一しているとみられ、今後、その区域の発掘調査が望まれる。出土した遺物は全部で65箱で、前述の土器の他に、茶臼や砥石などの石製品、木簡・漆碗や井戸枠・礎板などの木製品、繩の羽口や鉛錠などが出土した。

これらの遺構・出土遺物からこの地における古墳時代から中世にかけての人々の暮らしぶりや集落の存在、信仰の様子などをうかがい知ることができる。

第4図 D区基本層序

2 遺構

A 挖立柱建物跡

掘立柱建物跡は大きく6つの区域に集中して検出された。aグループはA区北東部で検出されたS B3901～S B3908である。bグループはA区中央北寄りで検出されたS B3909～S B3911である。cグループは、A区北西端で検出されたS B3912～S B3922である。dグループはD区北東端の堀の内側で検出されたS B3924～S B3926である。eグループはD区中央のS D2003の内側で検出されたS B3927～S B3938である。fグループはD区南西端で検出されたS B3939～S B3941である。なおS B3923はB区南東端で一棟だけ検出された。

検出された41棟の掘立柱建物跡をタイプ別に6つに分類した。分類1は規格が1間×2間か1間×1間の建物跡で面積が10 前後の規模の小さい建物跡である。分類2は規格が2間×2間で面積が15 前後の建物跡である。分類3は規格が2間×3間か1間×2間で、面積が15～30 前後の建物跡で最も多いタイプである。分類4は正方形の形の建物跡で面積が25 前後の建物跡である。分類5は規格が3間×3間か2間×3間で面積が40～60 前後の建物跡である。分類6は面積が60 以上の大型の建物跡である。詳細については、一覧表にまとめた表2 を参照されたい。以下に、集中して検出された区域ごとに詳細を記述する。

A区検出a グループ掘立柱建物跡

A区北東部では8棟の建物跡が検出された。S B3901～S B3904はすべて重複しており、時間をおいて建て替えられたものであろう。S B3904とS B3906は棟軸方向が同じで同一時期の建物と考えられる。また、S B3902とS B3907も棟軸方向が同じことから同一時期のものと考えられる。S B3901とS B3903は重複するが、S B3905と棟軸方向を同じくするので、どちらかが同一時期のものであろう。S B3908は物置小屋のような建物であったと考えられる。この区域で検出された建物跡の中からS B3901を抽出して詳細を記述する。

S B3901(第30図)はA区の北東部A B3861第IV層上面で検出された南北棟の掘立柱建物跡である。前述のS B3902, S B3903, S B3904建物跡と重複している。身舎は

梁行3間、桁行3間で、東西梁行6.1m、南北桁行6.7mの規模を測り、平面積は40.87 となる。建物跡の軸方位は、N-2°-Eを示す。柱間距離は、北面梁SP0707, 0705, 0799, 0772で西から1.8m、1.5m、2.8m、南面梁行SP0731, 0799, 0794で西から2.2m、3.9m、東面桁行SP0772, 0787, 0794で北から3.0m、3.8m、西面桁行SP0707, 0712, 0725, 0731で北から1.2m、3.4m、2.1m、を測る。南面梁行SP0799とSP0794の中間に検出できなかった柱穴があると思われる。柱穴掘り方は、径18～43 、深さ6～18 の円形ないし梢円形を呈する。1基の柱穴から柱痕が検出された。柱痕は径12 の円形を測り、掘り方底面まで達している。柱痕の堆積土は黒色シルトであった。柱痕のないものは抜き取られたと考えられる。柱穴の埋土からの遺物の出土はない。これらの建物跡が機能した時期は中世の時期と考えられる。

A区検出b グループ掘立柱建物跡

A区中央北よりでは3棟の建物跡が検出された。S B3909の東西軸とS B3910の東西軸がほぼ一致するので、同一時期の建物であると考えられる。S B3911は構成する柱穴の中の2基で柱痕が見られた。この建物は分類1に属し、規模が小さく、物置小屋のような建物であったと推測される。この区域で検出された建物跡の中からS B3909を抽出して詳細を記述する。

S B3909(第38図)はA区の中央北よりA B4054第IV層上面で検出された東西棟の掘立柱建物跡である。S D0269に接続している。この建物跡は今回の調査で41棟の建物跡のうち、最も柱穴が整然と並んでいる総柱建物跡である。身舎は梁行2間、桁行3間で、大きさは東西桁行8.0m、南北梁行3.9mの規模を測り、平面積は30.4 となる。建物跡の軸方位は、E-18°-Nを示す。S B3910の東西軸方位がほぼ同じ値を示す。柱間距離は、梁行でいずれも1.9mで、桁行ではいずれも2.6m前後ではば等間隔にならんでいる。柱穴掘り方は、24～40 、深さ3～17 の円形ないし梢円形を呈する。柱痕は確認できなかった。柱穴の埋土からの遺物の出土はない。これらの建物跡が機能した時期は中世の時期と考えられる。

A区検出c グループ掘立柱建物跡

A区北西端では11棟の建物跡が検出された。S B3912とS B3913は重なっているが、柱穴の並び方及び面積がほぼ同一で、同じような建物を建て替えていることがわ

かる。また、S B3914～S B3918はすべて重複しており、時間において建て替えられたものであろう。その中のS B3917はS B3912と棟軸方向がほぼ同じなので、同一時期の建物跡と考えられる。また、S B3913とS B3919も棟軸方向がほぼ同じことから同一時期の建物と考えられる。また、S B3919とS B3920、S B3921は重複することから、建て替えによるものと考えられる。なお、S B3922は物置小屋か作業場のような建物であったのではないかろうか。この地区で検出された掘立柱建物跡の中で、S B3912について詳細を記述する。

S B3912（第41図）はA区の北西部A B4549第IV層上面で検出された南北棟の掘立柱建物跡である。前述の通りS B3913建物跡と重複している。身舎は梁行2間、桁行3間で、大きさは東西梁行5.1m、南北桁行も5.1mの規模を測り、面積は26.26となる。建物の軸方位は、N-5°-Eを示す。柱間距離は、梁行がいずれも2.6m前後で、桁行では西面桁行S P1431,0023,0029,0041で北から1.8m、1.2m、2.1m、を測る。この西面桁行の中央部の柱間が狭いのは建物の入り口だったからであろうと推測される。なお、東面桁行の南北角で検出できなかった柱穴があると思われる。柱穴掘り方は、30~36cm、深さ8~35の円形ないし梢円形を呈する。柱痕は確認できなかった。柱穴の埋土からの遺物の出土はない。これらの建物が機能した時期は中世の時期と考えられる。

B区検出掘立柱建物跡

B区では1棟のみ掘立柱建物跡が検出された。

S B3923（第52図）はB区の南東部A B4043第III層上面で検出された南北棟の掘立柱建物跡で、西側に歛状造構が集中している。身舎は梁行2間、桁行3間で、大きさは東西梁行3.7m、南北桁行4.9mの規模を測り、面積は18.18となる。建物跡の軸方位は、N-11°-Wを示す。柱間距離は、北面梁行SK0976.1022,1020で西から2.1m、1.6m、南面梁行SP1051,SK1044,SP1047で西から2.0m、1.8m、東面桁行SK1020,SP1029,1032,1047で北から2.1m、1.1m、1.7mを測る。東面桁行の中央部の柱間が狭い部分はこの建物の出入り口であったと思われる。西面桁行で検出できなかった柱穴があると思われる。柱穴掘り方は、28~64cm、深さ15~31の円形ないし梢円形を呈する。柱痕は一ヵ所検出され、径10の円形を呈する。柱痕の堆積土は黒色砂質シルトであった。柱痕のな

いものは抜き取られたものと考えられる。柱穴の埋土からの遺物の出土はない。この建物跡が機能した時期は中世の時期と考えられる。

D区検出d グループ掘立柱建物跡

D区北東端の堀の内側では3棟の建物跡が検出された。いずれの建物跡も棟筋が堀に平行になっている。S B3925とS B3926は同一時期に建っていた可能性がある。また、いずれの建物跡も構成する多くの柱穴から礎板が出土した。この3つの建物跡の中からS B3924について詳細を記述する。

S B3924（第53図）はD区の北東端A B4940第IV層上面で検出された南北棟の掘立柱建物跡である。S B3925と重なるので、同一期のものではない。堀に近接しており、建物を構成する柱穴の約半分に礎板が敷かれてあった。堀の外側の建物よりも明らかに上級の建物であったことが推測される。大きさは北面の東西梁行8.0m、東面の南北桁行が9.2mを測り、面積は73.6で、大型建物跡の（分類6）に属する。柱穴の並びから、南面に庇があったか、建物内部が間仕切りされていた可能性が考えられる。いずれにしても方形居館内の重要な建物であったことは間違いない。これら堀の内側の建物が機能した時期は中世の時期であろう。

D区検出e グループ掘立柱建物跡

D区中央のS D2003の内側では12棟の掘立柱建物跡が検出された。この地区は多くの建物跡が集中しており、お互いに重複している。そこで、棟筋方向などから同一時期に建っていたであろう建物跡のグループ分けを試みた。1つめのグループは、S B3928,S B3934,S B3938である。2つめのグループはS B3929,S B3931,S B3933,S B3936である。3つめはS B3930とS B3935である。従って、S B3927とS B3932はその他の時期の建物跡ということになる。

D区検出f グループ掘立柱建物跡

D区南西端では3棟の掘立柱建物跡が検出された。S B3939とS B3940は重複するので時代は異なるが、どちらかがS B3941と同一時期の建物跡ではないかと考えられる。この3つの建物跡の中からS B3941について詳細を記述する。

S B3941（第71図）はD区の南西端A B4825第IV層上面で検出された南北棟の掘立柱建物跡である。他の建物

との重複はないが、すぐ北隣に S B3939, S B3940が検出されている。身舎は梁行2間、桁行2間で、大きさは北面の東西梁行が4.8m、東面の南北桁行が6.5mの規模を測り、平面積は31.2 となる。建物跡の軸方位は、N-37° Eを示す。柱間距離は、南面梁行SP2267, 2518, 2519で西から3.0m、2.0m、西面桁行SP2458, 2477, 2267で北から2.4m、3.9mを測る。本建物跡の北東角に検出できなかつた柱穴があると思われる。柱穴掘り方は、29~55cm、深さ24cm 前後の梢円または隅丸方形を呈する。柱痕は検出されなかつた。これらの建物跡が機能した時期は中世の時期と考えられる。

今回の調査では掘立柱建物を組んだ柱穴の他に、数多くのピットが検出されているため、実際にはまだまだ多くの掘立柱建物が存在していたと考えられる。

B 周 溝

S H2001 (第72図、巻頭写真3)

D区西端で検出された円形周溝である。周溝の規模は南北方向の外辺18.0m内辺15.3m、東西方向の推定の外辺17.9m内辺14.9mではば円形を呈している。周溝西側は標高が低くなつており、元々あった周溝が後に削平を受けたと見られ途切れている。溝の断面は緩やかな弧を描き、外側の壁が主体部側の立ち上がりよりも急になる傾向がある。溝の規模は幅約0.52m~1.98m、深さ約16cm~40cm である。周溝内の覆土は自然堆積によるものと見られ、粘質土と砂質土から構成される。出土遺物について床面から弥生時代中・後期の土器（252~254）、中間層より古墳時代前期の土師器高壺の脚部（249）、同じく壺の口縁部（250）等、上層からは弥生土器、古墳時代の土師器、須恵器稜碗（255）等が出土している。主体部の存在を確認するために十字にトレンチを入れたが、主体部を確認することができなかつた。しかし、溝の埋土の堆積状況を見ると、埴丘側から崩れた土砂が先に堆積しており、かつ堆積した土壤に混入物が混じることから、人為的に動かされた土壤と考えられる。従つてこの周溝が掘られた当時は埴丘があつたと推測することができる。よつてこの周溝は円形周溝墓の溝ではなく、古墳時代前期の円墳周濠であったと考えられる。V総括でも述べるが、この地の字名が「天王」と名付けられたことは、ここに古墳が造られたことと深い関係があるものと考えら

れる。小字の「塚原」という地名も、ここが死者を葬つた場所であったことを意味しているのではないだろうか。

S H2002 (第74図、巻頭写真3)

D区周溝 S H2001のすぐ北で検出された円形周溝で、検出されたのは周溝のほぼ半分ほどで、残りの半分は調査区外の畠の方に延びており、完全な円形を呈していたと思われる。推定規模は外辺の直径が約22mとなる。溝の断面は弧を描き、主体部側よりも外側の壁の立ち上がりが極端に急角度である。溝の規模は幅約1.89m~3.26m、深さ約60 ~64cm である。周溝内の覆土は自然堆積によるものと見られ、粘質土から構成される。出土遺物は1層から2層にかけて、古墳時代前期の土師器、弥生土器が出土している。中でも器台261（第131図、写真図版32）は古墳時代前期の特徴的な遺物で、塙釜式期後半のものと考えられる。よつて本周溝も S H2001と同様に、古墳時代前期4世紀頃の円墳周濠と判断できる。この周溝の南側に2カ所、内側にくぼんだ部分がある。これは祭祀を行う際、溝を渡るために橋を架けた痕跡ではないかと考えられる。周溝 S H2001にも同様のことがうかがえる。

S H2004 (第76図、写真図版2)

D区 S H2002のすぐ東隣で検出された。S H2002と同様、検出されたのは周溝のほぼ半分で、残りの半分は調査区外の畠の方に拡がり、完全な円形を呈していたと思われる。推定規模は、外辺の直径が約23mになる。溝の断面は浅く、床面は若干弧を描くがほぼ平坦である。溝の規模は幅約1.12m~2.35m、深さ約8 ~26cm である。周溝内の覆土は自然堆積によるものと見られ、粘質土や粘土などから構成される。出土遺物として弥生土器鉢（299）、古墳時代の土師器壺（296）、古代の土師器、古代の須恵器横瓶（291）などが出土している。遺物からだけでは造構の時期判定は難しいが、前述の古墳周濠との配置関係や本造構の形状等から見て、古墳の周濠である可能性が高い。

以上のS H2001、S H2002、S H2004は、山形県内ではあまり例の多くない、古墳時代前期4世紀の平地に作られた古墳群と考えられる。

C 溝 跡

S D 2003 (第78図)

D区S H2004のすぐ南に隣接して検出された、一辺がなく東側が開いた方形状を呈する溝跡である。西端の南北方向の外辺が18.4m、内辺が16.8mを測る。東側の方形が途切れた部分の南北方向の外辺がおよそ15m、内辺が14mを測り、西から東に向かって次第に幅が狭まった形状を呈する。この形状は前方後円墳の前方部を彷彿とさせる。溝跡の断面の多くは弧を描き、溝跡の規模は幅約0.43m～0.96mと狭く、深さは約12～42cmで、南北の外辺から想像される前方後円墳の周濠にしては溝の幅があまりに狭い。さらに、前方部に続くはずの後円部分を形成する遺構が検出されなかった。このため、本遺構は古墳の周濠である可能性は低いと思われる。本溝跡からは、北陸北東部の特徴を持つ古墳時代前期の窯底部(287)や奈良時代の須恵器、土師器が出土しており、遺構の年代判定は難しい。集落を囲む区画溝の可能性も考えられる。

S D 0269 (第80図、巻頭写真2)

A区のはば中央を南北に走り、A区を東西に二分する溝跡である。後述の溝跡S D0379とはほぼ平行に走っている。A B4355グリッド及びA B3749グリッド付近で後述のS D0379とつながる。溝跡が走る方向は南北軸に対して東に56度傾いている。溝跡の幅は280～450で、深さは47～70を測る。堆積層数は場所によって異なるが、一部人為的に埋められた痕跡が見られる他は自然堆積である。この溝跡からは、須恵器系陶器・青花・瓷器系陶器・かわらけなどの中世陶磁器の他、流れ込みと思われる須恵器・土師器も出土している。また木製品では、箸・下駄・曲物・くりもの皿などが出土している。3層から中世陶磁器が出土していることから考えて、溝跡S D0269は中世の遺構と考えられる。

S D 0379 (第80図、巻頭写真2)

前述のS D0269のすぐ西に位置している。溝跡の幅は100～540で、深さは28～92を測る。堆積層は、一部人為的に埋められた痕跡が見られる他は自然堆積である。S D0269との新旧関係であるが、第81図のa-a'の断面図を見ると、S D0379がS D0269を切っているので、S D0269が堆積土で埋まつた後に、S D0379が形成

された。本溝跡からは須恵器系陶器が、流れ込みと思われる須恵器・土師器と共に出土している。時期はS D 0269同様、中世の溝跡と考えられる。

D 堀 跡

S G 0935 (第89図、巻頭写真2) S G3216 (第94図)

B区とD区にまたがった北端で検出された。遺構確認面はⅢ層である。堀跡は北東方向及び北西方向に伸びており、調査区外の畑の方に広がっていると思われる。堀跡の東西軸方向はE-24°-Nである。確認面での幅は40～840で、検出面からの深さは26～100を測る。底部はほぼ平である。本堀跡からは、瓷器系陶器・須恵器系陶器・青磁などの中世陶磁器が多数出土した。また、三角形の頭部(山型)が屋根で覆われている独特の形をした板碑や石臼などの石製品、漆器などの木製品が出土した。その他流れ込みと思われる須恵器や土師器も出土しているが、堀跡の底面から中世陶磁器が出土していることから、本堀跡は中世に作られた堀跡であろう。S G 0935のF 4出土の瓷器系陶器180(第126図、写真図版29)の放射性炭素年代測定をした結果、14世紀の遺物であることが判明した。また堀跡の内側から半島状に突き出ている部分があり、輪郭が直線でかたどられており、明らかに人為的に作られた痕跡が看取れる。この半島状に突き出ているのはそこに橋を架けたためではないかと推測される。この第1次調査で検出された堀跡の続きが、第2次調査でも検出された。それがS G 3216と登録された堀跡である。この堀跡の存在から、ここ天王に「テンノウさま」を屋敷神とする、堀で囲まれた方形居館があったのではないかと推測される。それを裏付ける出土遺物として、茶臼(124)・茶入れ(131)・かわらけ(4)・青磁(159)などがあげられる。また、堀跡の内側(北側)からは礎板を伴った柱穴が28基検出され、掘立柱建物跡を3棟組むことができた。なお、本堀跡のF 4層から採取した土壤を珪藻分析した結果、堀は河川によって運搬された土壤によって埋積されたことが判明した。これは堀の中に河川から水が導水されていたか、河川の氾濫の影響を受け土砂が堀の中に埋積した可能性が考えられる。つまり、堀の水はよどんだ状態ではなかった可能性が高いということである。また、堆積層を観察すると、土壤がブロック状に混入している層が多く看

取される。これは堀が人為的に埋め戻されたことを示している。

E 河 川 跡

S G2005 (第95図、写真図版12)

D区西端の第IV層上面で検出された河川跡である。川筋は南北軸に対して東に28度傾いている。川幅は34cm ~60cmで、川上（北）から川下（南）に向かって少しづつ広くなっている。深さは40 ~73 を測る。堆積層は3層で、粗砂が多量に混入した自然堆積である。この河川跡からは板碑一基（219）の他、壺器系陶器・須恵器・土師器・繩文土器・弥生土器など20点ほど出土した。板碑が出土していることから中世の河川跡と考えられる。

F 土 坑

今回の調査では数多くの土坑が検出され、記録保存している。その中で遺物が出土した土坑を中心に72基の土坑の実測図と写真を掲載した。ここではその中の12基の土坑について記述する。

S K0001 (第96図、写真図版16)

A区北西端 A B4548グリッドに位置し、掘立柱建物跡 S B3913の北隣にある。検出面はIV層上部で標高は222.6mを測る。規模は長径132 、短径114 で平面形は不整円形である。検出面からの深さは44 で底面は平坦である。堆積層は3層確認した。遺物は床面から茶臼（124）が出土した。

S K0320 (第96図)

A区北西端 A B4451グリッドに位置する。検出面はIV層上部で標高は222.8mを測る。規模は長径297 、短径142cmで平面形は梢円形である。検出面からの深さは15 と浅く、底面は平坦である。堆積層は1層確認した。遺物は青磁・白磁・砥石が出土した。

S K0336 (第96図、写真図版16)

A区北西部 A B4349グリッドに位置し、掘立柱建物跡 S B3920の東隣にある。検出面はIV層上部で標高は222.7mを測る。規模は長径94 、短径77 で平面形は梢円形である。検出面からの深さは20 と浅く、底面は平坦である。堆積層は2層確認した。遺物は瀬戸美濃の茶入れ（131）が出土した。

S K0751 (第97図、写真図版16)

A区東端 A B3560グリッドに位置する。検出面はIV層上部で標高は222.9mを測る。規模は長径77 、短径69 で平面形は不整円形である。検出面からの深さは47 で底面は平坦である。堆積層は3層確認した。遺物は木製品の曲げ物の底板（386）が出土した。

S K1353 (第98図、写真図版16)

B区の堀跡の内側で堀跡に半島状に突き出ている部分 A B4743グリッドに位置する。検出面はIV層上部で標高は222.4mを測る。規模は長径93 、短径50 で平面形は不整円形である。検出面からの深さは14 と浅く、底面は凹凸がある。遺物は礎板4点が出土しており、堀に架けた橋を支える役割を果たしていたと考えられる。

S K1471 (第98図、写真図版17)

A区北西端 A B4547グリッドに位置する。検出面はIV層上部で標高は222.6mを測る。規模は長径104cm、短径83 で平面形は不整梢円形である。検出面からの深さは85 で底面は平坦である。遺物は火打ち石（138）と古銭（139）が出土した。本土坑を範囲内に含む性格不明遺構 S X1432の覆土には多量の炭化物が混じっており、何かを燃焼させる施設だった可能性が考えられる。

S K0747 (第100図、写真図版18)

A区東端 A B3560グリッドに位置する。検出面はIV層上部で標高は222.9mを測る。規模は長径92 、短径78 で平面形は不整円形である。検出面からの深さは64 で底面は平坦である。堆積層は3層確認した。北に隣接するS K0746を切っているので、S K0746が埋まった後に本土坑 S K0747が掘られたことがわかる。遺物の出土はない。

S K0923 (第101図、写真図版19)

B区南端 A B3941グリッドに位置し、畝状遺構に囲まれている。検出面はIII層上部で、標高は222.4mを測る。規模は長径400 、短径87 で平面形は不整梢円形でひょろ長い形を呈する。検出面からの深さは40 で、底面は平坦である。堆積層は3層確認した。遺物の出土はない。

S K3399 (第104図、写真図版20)

D区南東部 A B4533グリッドに位置する。検出面はIV層上部で標高は222.05mを測る。規模は長径156 、短径152 で平面形は不整円形である。検出面からの深さは45 で、底面は平坦である。堆積層は3層確認した。遺

物は曲げ物をまとめる竹製のタガ422（第148図、写真図版56）が出土した。

S K 3495（第104図、写真図版21）

D区南東部A B4635グリッドに位置する。検出面はIV層上部で標高は221.85mを測る。規模は長径152、短径146で平面形は不整円形である。検出面からの深さは60cmで、底面は湾曲している。堆積層は5層確認した。遺物は須恵器2点（324・325）、漆器曲げ物の底板（430）などが出土した。

S K 3590（第105図、写真図版21）

D区北東部A B5138グリッドに位置し、堀跡の内側にある。検出面はⅢ層上部で標高は222.35mを測る。規模は長径44、短径40で平面形は円形である。検出面からの深さは20と浅く、底面は湾曲している。堆積層は2層確認した。遺物は礎板（443）が出土している。何らかの柱穴であったと思われるが、掘立柱建物跡等を組むことができなかった。

S K 3612（第106図、写真図版22）

D区北東部A B5038グリッドに位置し、前述のS K 3590と同様に堀跡の内側にある。検出面はⅢ層上部で標高は222.45mを測る。規模は長径60、短径52で平面形は梢円形である。検出面からの深さは28と浅く、底面は湾曲している。堆積層は2層確認した。遺物は木柱（451）が出土している。何らかの柱穴であったと思われるが、掘立柱建物跡等を組むことができなかった。

G 井戸跡

井戸跡は23基検出している。A区東端に1基、A区西北部に3基、B区拡張部に2基、D区北東端に1基、D区中央部に5基、D区南西部に10基、D区北西部に1基である。S E2567とS E3220は曲げ物の井戸枠を設置した井戸跡で、その他の井戸跡はすべて素堀の井戸跡であった。また、いずれの井戸跡からも掘り下げ時から著しい湧水が見られた。すべて中世の遺構と考える。

S E 2567（第110図、写真図版15）

D区南西部の井戸跡がかたまって検出された区域に位置し、周囲にはS B3939・3940・3941などの掘立柱建物跡がある。本井戸跡は中央の井戸枠（409・410）とその外側の掘り方からなる。掘り方平面形は梢円形を基調とし、規模は長径158、短径138、底部径は57を測る。

検出面からの深さは56、断面形は台形状を呈する。井戸枠はスギを利用した曲げ物で、何段か重ねて円筒状に構築されていたものと思われる。検出面から井戸跡底部にかけて4層の土層が堆積し、粘質土、粘土が堆積しており、井戸廃絶後に徐々に埋没していったと見られる。遺物は井戸枠（409・410）の他、須恵器甕（304）など須恵器、土師器が数点ずつ出土している。

S E 3220（第112図、写真図版15）

D区中央北よりの周溝S H2004の南に位置し、周りには掘立柱建物跡S B 3927・3928・3930・3931などがある。本井戸跡は中央の井戸枠（411～414）とその外側の掘り方からなる。掘り方平面形は梢円形を基調とし、規模は長径164、短径124、底部径は46を測る。検出面からの深さは127、断面形は長胴形を呈する。井戸枠はスギを利用した曲げ物で、何段か重ねて円筒状に構築されていたものと思われる。中でも遺物番号414（第146図、写真図版55）の井戸枠は遺存状態が良く、井戸として使用されていた当時とほぼ同じ状態で出土した。覆土は粘質土で、粗砂が中量、均一に混入しており、下位から石が多数出土した。この石は井戸を廃絶する際の祭祀に伴って投げ込まれたものと推測する。遺物は井戸枠（411～414）の他は出土していない。

S E 1349（第108図、写真図版13）

B区拡張部北端に位置し、周囲に掘立柱建物跡は確認されていないが、方形居館の堀跡の内側にある。S E 1348と接しており、S E 1349がS E 1348を切っているので、S E 1348を廃絶した後に新たに掘り直した井戸跡と見られる。掘り方平面形は隅丸方形で、規模は長径115、短径114、底部径52を測る。検出面からの深さは68で、断面形は台形状を呈する。堆積土は4層からなり、その堆積の様子から、人為的に埋められたことが推測される。出土遺物は木製の曲げ物2点（382・383）と柱状塔婆の先端部分と思われる木製品（384）が出土している。この木製品（384）は井戸を廃絶した際に行われたであろう祭祀に何らかの関係があるのでないかと思われる。

H ピット

今回の調査では数多くのピットが検出された。その中で主に遺物が出土したピットを中心に16基のピットの実

測図と写真を掲載した。ここではその中の3基のビットについて記述する。

S P3143 (第113図、写真図版23)

D区中央A B5031グリッドに位置し、掘立柱建物跡S B3927を構成する柱穴である。検出面はIV層上部で標高は222.05mを測る。規模は長径62°、短径36°で平面形は楕円形である。検出面からの深さは18°と浅く、底面は湾曲している。遺物は木柱(470)が出土している。

S P3656 (第113図、写真図版23)

D区北東部A B4939グリッドに位置し、堀跡の内側にある。掘立柱建物跡 S B3924を構成する柱穴である。検出面はIII層上部で標高は222.65mを測る。規模は長径36°、短径36°で平面形は不整円形である。検出面からの深さは22°と浅く、底面は平坦である。堆積層は2層確認した。遺物は礎板が4点出土している。

S P3663 (第114図、写真図版23)

D区北東部A B4939グリッドに位置し、堀跡の内側にある。掘立柱建物跡 S B3924を構成する柱穴である。検出面はIII層上部で標高は222.45mを測る。規模は長径52°、短径48°で平面形は楕円形である。検出面からの深さは18°と浅く、底面は平坦である。堆積層は3層確認した。遺物は礎板(475・476・477他)が6点出土している。

I 性格不明遺構

今回の調査では7基の性格不明遺構(S X)が検出され、記録保存している。その中から2基の性格不明遺構を抽出して実測図と写真を掲載した。ここではそのうちの1基について記述する。

S X3001 (第115図、写真図版24)

D区中央北寄りのA B5230グリッドに位置し、周溝SH2004の南にあたる。検出面はIV層上部で標高は221.95mを測る。規模は長径280°、短径73°で平面形は不整楕円形である。検出面からの深さは102°と底面は凹凸がある。堆積層は8層確認した。遺物は木製の板が出土している。本遺構の役割や性格については不明である。

3 遺 物

A 縄文土器

今回の調査で、縄文時代の土器は小さな破片を含めて161点出土した。そのうち5点のみ実測図を作成し、報告書に掲載した。

31は深鉢の体部である。地文の文様は撚糸文で、縄文時代後期前半の遺物である。割れ口は輪積みの際のつなぎ目にあたる。胎土に金雲母が多量に含まれているところが特徴的である。236も深鉢の体部である。地文はLRの結節回転文により施文されており、縄文時代前期後半か、後期前半の遺物である。胎土に石英が微量含まれている。いずれの縄文土器も川の氾濫などにより流れ込んだものと考える。遺構との関連はない。

B 弥生土器

今回の調査で出土した弥生時代の土器は計146点である。そのうち30点を抽出して実測図を作成し、報告書に掲載した。

119は壺の体部で、地文に附加条文が施文されており、縄目と縄目の間が広いのが特徴的である。弥生時代中期後半の遺物である。297と357はいずれも蓋の一部である。どちらも半裁竹管により外面に小波状文が施文されている。同様に326の壺の体部も半裁竹管による平行沈線が外面に施されている。この3つの遺物も弥生時代中期後半の土器で、119も併せて、いわゆる「桜井式」の範疇に属するものである。

C 古墳時代の土師器

古墳時代の土師器はすべてD区から出土している。出土した総数は575点で、そのほとんどが周溝から出土している。中でも周溝SH2002からは315点出土しており、際立って多い。2番目に多いのが周溝SH2001で86点出土している。これらの土師器は全体的に遺存状態が悪く、状態の良い物について抽出を行い報告書に掲載した。器種別では、器台・高杯・小型丸底壺・壺・壺が認められる。261(第131図、写真図版32)の器台は外面に赤色顔料が塗布されており、すかしがあり、外面にケズリの調整痕が見られる。その器形から古墳時代前期の特徴的な遺物で、塙釜式期後半のものであることがわかる。この器台の出土から、周溝SH2002を4世紀頃に造られた円

墳の周濠と考えられた。

249は高環の脚部で古墳時代前期4世紀のものである。261同様、赤色顔料が内面・外面に塗布されている。この261と249は胎土分析を行っている。IV章で述べられているように、予想通り、いずれも米沢盆地外からの搬入品である可能性が高いという結果が得られた。当時どのような流通経路をたどって天王にもたらされたものなのか、今後の調査・研究によって明らかにされることを期待する。111の高環の脚部は249や163に比べて細く短いことから、ミニチュア土器と考えられる。S D2003から出土した古墳時代前期の壺の底部287は、北陸地方北東部の特徴を持った土師器である。これらは北陸地方から東北地方に移り住んだ人々がつくった土器である。250の壺も典型的な北陸地方の特徴を持った土師器で、口縁部の端を最後にヘラで面取りをして、口縁部の端が平にならっているのが特徴の一つである。257は小型丸底鉢で、器台の上に乗せるための器である。折り返し口縁が特徴的である。同じ南陽市の蒲生田山古墳3号墳は4世紀前半に造られた前方後方墳であるが、天王遺跡と同じように、北陸地方の特徴を持った遺物が出土していることは興味深い。

D 須恵器

本遺跡から出土した須恵器は718点に及ぶ。その多くは川・溝から出土したもので、調査区外からの流れ込みによるものと考える。また、今回の調査で行った理化学分析で、1点の須恵器の放射性炭素年代測定を行っている。分析を行ったのは86で環の底部の破片である。この須恵器の割れ口の部分に付着している漆を年代測定した結果、1220～1260年頃の鎌倉時代の漆である可能性が示された。この放射性炭素年代測定が正しいとすると、ここ天王では中世になっても須恵器を補修しながら使用（転用）していたことになる。このような事例が近隣の遺跡でないか調べる必要がある。

本遺跡で出土した須恵器のうち、触れておきたいのが2点の横瓶である。1点は53（第119図、写真図版45）で口縁部は残存していなかったが、1個体に復元することができた。2点目は291（第131図、写真図版45）で体部の三分の一ほどは失われているが、口縁部がほぼ完全な形で残っている。いずれの横瓶も、古代に造られ、使用

されたものが流れ込んだものと推測する。

E 瓷器系陶器

今回の発掘調査で出土した瓷器系陶器は81点であった。いずれも在地の窯で焼かれたものである。179は常滑に類似した瓷器系陶器で、外面のヘラ調整痕のかきあげによりていねいに造られている。158と130は一見色が違うが、胎土をよく観察すると、同じ窯で焼かれたものであることがわかる。180と231の2点の放射性炭素年代測定を行った。その結果、180に付着していた炭化物は14世紀、231に付着していた漆は13世紀～14世紀のものであることが分かった。分析結果から、いずれの遺物も中世に使用されたことが分かり、形式的な年代と使用された年代が矛盾しない結果となった。

F かわらけ

2つの溝跡（S D0269・1362）から4・32・106の3点のかわらけが出土した。いずれも口縁部の破片で、103のみがロクロ成形である。また3点とも外面と内面にナデの調整が見られる。かわらけは宴会や儀式等で使用された使い捨ての蒸焼きの土器である。一般庶民が家で使用するものではなく、このかわらけの出土は近くに政治的権力か宗教的な権威が存在したことを物語っている。これも、ここ天王に「テンノウさま」を屋敷神とする方形居館があったことの裏付けの一つとなろう。

G 須恵器系陶器

今回の調査で出土した須恵器系陶器は55点である。40壺は本遺跡で出土した須恵器系陶器の中の典型的な遺物で、外面の右下がりのタタキ目と内面の無紋のアテ痕が特徴的である。一見珠洲のように見えるが、胎土を観察すると海綿骨針が看取れない。タタキ目の幅が狭く、13世紀～14世紀のものと考えられる。この40と珠洲と思われた112の胎土分析を行った結果、どちらも同じ土を使っており、南陽市の平野古窯跡の須恵器と胎土組成がよく近似していることがわかった。本遺跡で出土したこのタイプの須恵器系陶器は珠洲などを模倣して近隣の窯で焼かれたものである可能性が高い。また8や14・37などのように内面に自然釉のかかったものもよく見られる。壺鉢の6と7は同一個体と思われ、ロクロで成形されて

いる。115の放射線炭素年代測定を行った。その結果、115の割れ口の部分に付着していた漆は1163~1215年頃のものであることが分かった。割れた鉢を漆で補修して使用したと考えられる。

H 輸入磁器

本遺跡で出土した輸入磁器は、青磁が13点、白磁が3点、青花が2点であった。184・75・76・126はいずれも青磁の碗で、中国龍泉窯で焼かれた13世紀~14世紀のものである。外面の鎮蓮弁文や内面に施された画花文が特徴的である。同じく青磁碗174は見込みに印花文が施され、底部豊付が無釉である。青花皿149と青花碗3はいずれも景徳鎮で焼かれた16世紀~17世紀のものである。これら高価な輸入磁器を使うことができる、財力のある者がこの地に存在したことが想像される。

I 潬戸美濃

前述の茶臼のところで記述したとおり、土坑S K0336から瀬戸美濃の茶入れ131（第123図、写真図版32）が出土している。鉄釉の茶入れの底部で、焼成の際に砂が底の部分に付着したまま摩滅していない。この131を後述の茶臼と共に使用し、茶道をたしなむ者がいたであろうことは充分に推測可能である。

J 板 碑

今回の発掘調査で3基の板碑が出土した。いずれも浅黄橙色の凝灰岩製で長さが35 前後、幅が29 前後の小型の板碑である。152と220はB区とD区にまたがる堀跡（S G0935・S G3216）から出土した。219はD区西端の河川跡（S G2005）から出土しており、投棄されたと思われる。3基とも三角形の頭部が上から覆う屋根で囲まれている。これは置賜地方独特の龕殿型（家型）板碑と呼ばれるタイプのもので、比較的新しい時期に造られた板碑である。また152は2基の板碑が並ぶ一般的な龕殿型板碑の片方であるが、219と220は1基で独立しており、大きさ、形態ともに南陽市内ではあまり見られないタイプの板碑である。これらの板碑が造られた当初、どのような信仰がこの地にあったのか、現在も祠の残る「テンノウサマ」や後述する木簡などと併せて今後解明すべき点である。

K その他の石製品

板碑の他にも様々な石製品が出土している。興味深いものの一つとして327（第133図、写真図版40）があげられる。鶴の卵のような形をした石の全面に漆が塗られており、糸を巻き付けやすいように人為的に筋目が入っている。網のおもりなどの用途が考えられるが、確かではない。この遺物も放射性炭素年代測定を行っている。その結果、石に塗られた漆は1310年~1360年頃の中世のものであることが示された。この結果を基に、他の類例を調べてみる必要がある。

124（第122図、写真図版44）の茶臼はS K0001の床面から出土したもので、327と同様、年代測定した結果、茶臼に付着していた炭化物は1353年~1390年頃の中世のものであることが分かった。S K0336からは瀬戸美濃の茶入れ（131）が出土しており、中世のこの地で茶道をたしなむ経済力を持ち、文化水準も高い人物がいたであろうことが推測される。

L 木 簡

ここからは本遺跡から出土した木製品の主な遺物について記述する。木簡378（第136図、写真図版50）は、厚さ1.5 の薄く細長い板の先端部分が主頭を呈し、墨で文字が描かれていた。赤外線スキャナーで「自 謂 己 得」という文字が確認できた。これを山形大学の三上喜孝准教授に鑑定してもらったところ、この文字は法華經の一部であり、13世紀頃の祭祀で使用されたものと判明した。卒塔婆の一種であり、この木簡の文字は字に慣れただけのものではないという鑑定であった。類例として、石川県金沢市の「堅田B遺跡」でも卷数（勧請）板という大型の木簡が出土しており般若心経が筆写されている。また本遺跡と同じく、四方を堀で囲まれた方形館が検出されている。この1点の木簡は、本遺跡が信仰と深く結びついた場所であったことを裏付けるものである。

M 柱状塔婆

前述の木簡同様に、仏教信仰のために造られた柱状塔婆の先端部分と思われる木製品384（第137図、写真図版50）が出土している。明らかに人工的に加工された木製品で柱状塔婆の先端部分に酷似している。類例として、

秋田県の「脇本城跡」の調査で完形の柱状塔婆が出土している（工藤、2006年）。本遺跡出土の398（第140図、写真図版52）も円錐形に削られた木製品で、柱状塔婆の先端部分に若干似ている。このような信仰に伴う遺物は、ここ天王の地が宗教色の強い土地柄であったことを物語っている。

N 井戸枠

今回の調査で素掘の井戸跡が多く検出されたが、原形をとどめた木製の曲げ物による井戸枠が配置された井戸跡は2基（S E2567, S E3220）検出された。井戸跡S E 2567から出土した井戸枠が409（第141図、写真図版54）と410（第142図、写真図版54）である。409は曲げ板10枚が重なっており、縦に連なっていた曲げ板が崩落して重なったものと思われる。本井戸跡S E2567は410の径665

を直径とする井戸枠で構成された井戸であったと推定される。一方S E3220から出土した井戸枠414は使用されていた当時の状態をほぼ完全にとどめた井戸枠である。411,412,413は414の上部から出土したものである。本井戸跡S E3220は414の径570 を直径とする井戸枠で構成された井戸であったであろう。以上の井戸枠は、樹種同定の結果、すべてスギ材を使ったものであった。スギは耐水性があり割裂性も高く、曲げ物に加工しやすかったのであろう。井戸跡S E2567, S E3220共に中世の井戸跡と推定する。

O 本地素材

今回の発掘調査で、木製の椀等を製作する際、内側をくりぬく前の段階の本地素材439（第149図、写真図版58）441（第149図、写真図版59）468,469（157図、写真図版62）が出土した。これら製作途中の椀が出土したことは、ここ天王に本地素材から漆椀に仕上げる過程あるいは木材から本地素材まで仕上げて移出する「椀作りの工房」があったと推測することができる。本地素材の他にも漆椀や漆皿、くりもの皿などが多数出土している。前述の井戸枠や417（第147図、写真図版56）のような曲げ物も何点か出土している。曲げ物も作れる工房があったのかかもしれない。

P 磁 板

本遺跡から出土した磁板は計67点を数える。その多くはD区からの出土であった。またほとんどが前述の堀跡S G0935, S G3216の内側（北側）からの出土であった。それらの磁板が出土した遺構を直線で結び、3棟の掘立柱建物跡（S B3924・3925・3926）を再現した。それらの多くはスギ材を利用しており、次にアスナロが続く。いずれも割裂性が高く、加工しやすい材質を有し、建築材などからの転用もあったと思われる。紙面の都合上、約半数ほどの磁板のみを本紙に掲載した。非掲載の磁板は後述の磁板タイプの集計を参照されたい。今回出土した磁板を5つのタイプに分類した。Aタイプは一般的な長方形型のもので、20点あった。Bタイプは平面形がほぼ正方形のタイプで、7点あった。Cタイプは厚みのある立方体を呈するタイプで、4点あった。Dタイプは細長いものや不定形のタイプで、28点あった。Eタイプは長さが30 以上の大型のタイプで8点あった。前述の堀跡の外側（南側）から磁板がほとんど出土しないことから、方形居館の外側に広がっていた集落の掘立柱建物は磁板を敷かずして柱を立てていたのであろう。この磁板の出土状況を見ても、堀の内側に重要な施設、建物が存在していたであろうことが推測できる。

なお、磁板が出土した遺構の中で、掘立柱建物跡の要素に入っていない遺構がある。S K3590, S K3602, S K3605, S K3611がそれにあたる。この4つの土坑は一直線上に並ぶので、調査区外北側に続く建物の柱穴か、構や塀であった柱列なのかもしれない。

Q 錢 貨

錢貨も7点出土している。132（第123図、写真図版46）には「開元通寶」という文字が刻印されている。これは唐時代から長い間流通した中国の錢貨である。この錢貨が日本で流通した時期の特定は難しい。84（第121図、写真図版46）には「元祐通寶」の文字が刻印されている。これは北宋時代に中国で鋳造された錢貨である。139（第123図、写真図版46）は「熙寧元宝」という北宋錢で、11世紀に中国で鋳造された錢貨である。137（第123図、写真図版46）には「皇宋通寶」という文字が刻印されている。これも中国の北宋錢で、輸入されたものか、日本国内でコピーされたものであろう。中世13,14世紀に流通した錢貨である。

表3 遺物(土器・石製品・金属製品・石器等)観察表(1) [] 残存値 () 指定値

遺物番号	名前	種類	出土位置	グリッド	寸法(高さ)	寸法(幅)	断面	外観	裏面	底面	形状	表面	施薬	地土	備考
116	1	石斧	石斧	S.D020F.1	A.B6269		P型	P型	P型	P型	白色、黒粒	10Y 6/1 黄灰			
	2	石斧	石斧	S.D020F.1	A.B6263		P型	P型	P型	P型	白色、黒粒	10Y 6/1 黄灰			
4	5	石斧	石斧	S.D020F.2	A.B6255		P型	P型	P型	P型	白色、黒粒	10Y 6/1 黄灰			
5	6	石斧	石斧	S.D020F.2	A.B6253	(122.0)	P型	P型	P型	P型	白色、黒粒	10Y 6/1 黄灰			
6	7	石斧	石斧	S.D020F.2	A.B6254		P型	P型	P型	P型	白色、黒粒	10Y 6/1 黄灰			
8	9	石斧	石斧	S.D020F.2	A.B6254		P型	P型	P型	P型	白色、黒粒	10Y 6/1 黄灰			
10	11	石斧	石斧	S.D020F.2	A.B6254		P型	P型	P型	P型	白色、黒粒	10Y 6/1 黄灰			
12	13	石斧	石斧	S.D020F.2	A.B6254		P型	P型	P型	P型	白色、黒粒	10Y 6/1 黄灰			
14	15	石斧	石斧	S.D020F.2	A.B6254		P型	P型	P型	P型	白色、黒粒	10Y 6/1 黄灰			
16	17	石斧	石斧	S.D020F.2	A.B6254		P型	P型	P型	P型	白色、黒粒	10Y 6/1 黄灰			
18	19	石斧	石斧	S.D020F.2	A.B6252	(60.0)	P型	P型	P型	P型	白色、黒粒	10Y 6/1 黄灰			
20	21	石斧	石斧	S.D020F.2	A.B6254	(146.0)	P型	P型	P型	P型	白色、黒粒	10Y 6/1 黄灰			
22	23	石斧	石斧	S.D020F.2	A.B6253	(140.0)	P型	P型	P型	P型	白色、黒粒	10Y 6/1 黄灰			
24	25	石斧	石斧	S.D020F.2	A.B6254	(96.0)	P型	P型	P型	P型	白色、黒粒	10Y 6/1 黄灰			
26	27	石斧	石斧	S.D020F.2	A.B6254	174.0	P型	P型	P型	P型	白色、黒粒	10Y 6/1 黄灰			
28	29	石斧	石斧	S.D020F.2	A.B6252	(126.0)	P型	P型	P型	P型	白色、黒粒	10Y 6/1 黄灰			
30	31	石斧	石斧	S.D020F.2	A.B6260	(128.0)	P型	P型	P型	P型	白色、黒粒	10Y 6/1 黄灰			
32	33	石斧	石斧	S.D020F.2	A.B6253	(110.0)	P型	P型	P型	P型	白色、黒粒	10Y 6/1 黄灰			
34	35	石斧	石斧	S.D020F.3	A.B6255		P型	P型	P型	P型	白色、黒粒	10Y 6/1 黄灰			
36	37	石斧	石斧	S.D020F.3	A.B6250		P型	P型	P型	P型	白色、黒粒	10Y 6/1 黄灰			
38	39	石斧	石斧	S.D020F.3	A.B6253		P型	P型	P型	P型	白色、黒粒	10Y 6/1 黄灰			
40	41	石斧	石斧	S.D020F.3	A.B6255	(120.0)	P型	P型	P型	P型	白色、黒粒	10Y 6/1 黄灰			
42	43	石斧	石斧	S.D020F.3	A.B6255	(66.0)	P型	P型	P型	P型	白色、黒粒	10Y 6/1 黄灰			
44	45	石斧	石斧	S.D020F.3	A.B6255	(14.0)	P型	P型	P型	P型	白色、黒粒	10Y 6/1 黄灰			
46	47	石斧	石斧	S.D020F.3	A.B6255	(256.0)	P型	P型	P型	P型	白色、黒粒	10Y 6/1 黄灰			
48	49	石斧	石斧	S.D020F.3	A.B6249		P型	P型	P型	P型	白色、黒粒	10Y 6/1 黄灰			
50	51	石斧	石斧	S.D020F.3	A.B6255	(56.0)	P型	P型	P型	P型	白色、黒粒	10Y 6/1 黄灰			
52	53	石斧	石斧	S.D020F.3	A.B6250	(269.0)	P型	P型	P型	P型	白色、黒粒	10Y 6/1 黄灰			
54	55	石斧	石斧	S.D020F.2	A.B6248	(96.0)	P型	P型	P型	P型	白色、黒粒	10Y 6/1 黄灰			
56	57	石斧	石斧	S.D020F.1	A.B6252		P型	P型	P型	P型	白色、黒粒	10Y 6/1 黄灰			
	58	59	石斧	S.D020F.1	A.B6251		P型	P型	P型	P型	白色、黒粒	10Y 6/1 黄灰			

表 3 遺物(土器・石製品・金属製品・石器等)観察表(3) () 残存値

卷之三

表 3 遺物(土器・石製品・金属製品・石器等)観察表(4) () 残存値

表3 遺物(土器・石製品・金属製品・石器等)観察表(5)

表4 木製品観察表(1)

[] 残存値

採団番号	遺物番号	写真図版	整理番号	器種	硬板 タイプ	出土位置	グリッド	登録番号	計測値 ()			樹種名	備考
									長さ	幅	厚さ		
136	370	49	1015	円盤		S D0269F 2	A B4155		169.0	84.5	7.5		
	371	49	1016	円盤		S D0269F 2	A B4155		118.0	45.5	8.5		
	372	49	1017	くりもの皿		S D0269F 2	A B4055		60.0	40.0	20.0		
	373	49	1018	くりもの皿		S D0269F 2	A B4055		50.0	30.0	20.0		
	374	49	1020	下駄		S D0269F 2	A B4152		141.0	62.0	12.1		
	375	49	1021	箸		S D0269F 2	A B4152		187.0	6.5	4.5		
	376	49	1027	箸		S D0269F 2	A B4154		200.0	5.5	4.0		
	377	49	1025	曲げ物		S D0269F 3	A B4054		153.5	61.0	3.5		
	378	50	1045	木彫		S D1362F 1	A B4355		146.0	19.5	1.5		
	379	50	1034	壺		S D1362F 2	A B4356		60.0	40.0	5.0		
	380	50	1013	漆器		S G0955灰黒	A B4747		30.0	15.0	3.0		
	381	50	1044	漆器組		E 03000	A B4248		50.0	50.0	4.0		
	382	50	1039	曲げ物		S E1369F	A B4944		253.0	46.5	4.5		
137	383	50	1041	曲げ物		S E1369F	A B4944		70.0	345.0	4.5		
	384	50	1040	柱状塔婆?		S E1369F	A B4944		72.0	28.0	20.2		
	385	51	1042	円盤		S K0299	A B4249		147.0	69.0	7.5		
	386	51	1036	曲げ物底板		S K0751	A B3660		262.5	247.0	18.0		
	387	51	1038	へら		S K1294F	A B4062		127.0	133.5	18.5		
138	388	51	1004	鏡板	E	S K1363	A B4743		341.5	89.5	22.5		
	389	51	1005	鏡板	E	S K1363	A B4743		369.5	164.0	23.5		
	390	51	1006	鏡板	B	S K1363	A B4743		270.5	260.5	28.5		
139	391	51	1008	鏡板	E	S K1367	A B4743		414.0	129.0	19.5		
	392	51	1009	鏡板	E	S K1367	A B4743		405.0	104.0	22.0		
	393	52	1043	板(墨書き)		S P1221F	A B4257		91.0	45.0	8.0		
140	394	52	2125	曲物底板		S D3668		R W101	往290.0	12.0		一部漆	
	395	52	2139	漆碗		S D3887	A B4638			6.5		4点接合	
	396	52	2106	木彫?		S G3216		R W120	114.0	19.5	4.5		
	397	52	2107	漆碗		S G3216		R W85	UH147.0J	高57.0	7.5		
	398	52	2128	不明		S G3216F	A B4830		115.0	29.0	25.0		
	399	52	2098	円盤		S G3216F 1	A B3034		往100.0	10.0			
	400	52	2113	丸棒		S G3216F 1	A B3034		41.0	43.0	40.0		
	401	53	2096	曲げ物成板		S E2889		R W131	往170.0	12.0			
	402	53	2142	曲げ物骨板		S E2889			45.0	71.0	2.0		
	403	53	2045	漆碗		S E3006F		R W130	L115.0				
	404	53	2148	漆碗		S E3006F			底径58.0	5.5			
	405	53	2160	漆皿		S E3006F			L100.0	4.0			
	406	53	2163-1	漆皿		S E3006F 2			底径80.0	5.3			
	407	53	2163-2	漆皿		S E3006F 2			底径66.0	5.5			
	408	53	2094	井戸秒		S E3220		R W138	32.0	87.0	5.0	スギ	
141	409	54	2200	井戸秒		S E2567	A B4826	R W12- 1	往598.0	高326.0	54.0	スギ	
142	410	54	2201	井戸秒		S E2567	A B4826	R W12- 2	往665.0	高218.0	26.0	スギ	
143	411	55	2195	井戸秒		S E3220	A B3222	R W138- 1	往504.0	高280.0	5.0	スギ	
144	412	55	2196	井戸秒		S E3220	A B3222	R W138- 2	往460.0	高216.0	8.0	スギ	
145	413	55	2197	井戸秒		S E3220	A B3222	R W138- 3	往460.0	高338.0	16.0	スギ	
146	414	55	2198	井戸秒		S E3220	A B3222	R W138- 4	往570.0	高624.0	26.0	スギ	
147	415	55	2099	円板		S K2963Y			往115.0	9.0			
	416	55	2164	曲げ物底板		S K2902			169.0	92.0	6.0		
	417	56	2030-1	曲げ物		S K2972		R W140	L115.0				
	418	56	2183	木柱		S K3151		R W133	260.0	67.0	107.0	カリ	
	419	56	2138	著		S K3224F			224.0	6.0	4.0		
	420	56	2123	円盤		S K3363			202.0	31.5	9.5		
	421	56	2111	角棒		S K3395F			308.0	17.0	14.0	スギ	
148	422	56	2199	曲げ物カガ		S K3399	A B4533	R W154	往590.0	往280	14.0		
	423	56	2149	漆皿		S K3415F	A B4635		1279.0	高92	4.0		
	424	56	2124	漆碗		S K3426F				5.5			
	425	57	2116	漆皿		S K3460F			往84.0	高10.0	4.0	マツ属根管 東北属	
	426	57	2153	著		S K3463F 1			126.0	5.5	5.0		
	427	57	2079	円盤		S K3463F 2			往322.0	9.0		墨付着	
	428	57	2070-3	著		S K3463Y			119.5	6.5	4.0		
149	429	57	2070-2	机		S K3463Y			291.0	32.0	22.0		
	430	57	2146	漆面/物底板		S K3495F			166.8	42.5	6.0		
	431	57	2165	著		S K3906F 1			138.0	6.0	4.0		
	432	57	2166	瓶		S K3908F 1			116.5	9.5	19.0		
	433	58	2080	漆碗		S K3522		R W 3	66.0	6.0			
	434	58	2168	漆碗		S K3522				8.0			
	435	58	2082	へら		S K3522		R W 4	200.0	40.0	5.5		

表4 木製品観察表(2)

桜田番号	造物番号	写真図版	整理番号	器種	被板タイプ	出土位置	グリッド	登録番号	計測値()			樹種名	備考
									長さ	幅	厚さ		
149	436	58	2085	山口T物底	S K3512		R W 6	87.0	44.0	6.0	ケヤキ		
	437	58	2086	板	S K3512		R W 5	106.0	54.5	15.5			
	438	58	2177	漆板	S K3512 F 2		L190	高16.0	3.0			底板67.0	
	439	58	2128	木地素材	S K3564 F	A B 5037		82.0	38.5	13.0			
	440	58	2126	著	S K3566 F			207.0	6.0	5.0			
	441	59	2063	木地素材	S K3577		R W 12	119.4	高33.0				
	442	59	2026	漆板	D S K3592		R W 56	155.5	123.0	34.0	スギ		
150	443	59	2023	漆板	B S K3590		R W 55	185.5	176.5	27.0	スギ		
	444	59	2006	漆板	E S K3600		R W 52	360.0	211.5	26.5	クリ		
	445	59	2096	漆板	A S K3602		R W 54	206.5	132.5	24.5		整理番号2091ヒ 接合	
151	446	59	2024	漆板	A S K3605		R W 45	200.0	94.0	23.0	スギ	遺物番号447と接合	
	447	59	2029	漆板	D S K3605		R W 46	203.0	86.0	26.0	スギ	遺物番号446ヒ接合	
	448	59	2143	曲面被板	S K3607	S K3608	R W 76	302.2	96.0	6.0			
152	449	60	2001	漆板	C S K3611		R W 88	87.0	167.5	121.0			
	450	60	2002	漆板	C S K3611		R W 87	90.0	159.5	122.0			
	451	60	2055	木柱	S K3612		R W 89	188.0	104.0	94.5	クリ		
153	452	60	2016	被板	B S K3626		R W 90	161.0	168.0	19.5	スギ		
	453	60	2017	漆板	B S K3626		R W 58	159.0	146.0	26.0	スギ		
	454	60	2018	漆板	A S K3626		R W 49	238.0	138.0	31.5		遺物番号453ヒ接合	
154	455	60	2039	漆板	A S K3626		R W 51	232.0	146.0	34.0		遺物番号454ヒ接合	
	456	60	2042	木柱	S K3669		R W 37	214.0	91.5	58.0	アスナロ		
	457	61	2010	漆板	D S K3670		R W 35	224.5	116.0	20.0			
155	458	61	2011	漆板	D S K3670		R W 34	257.5	98.0	34.0	スギ	整理番号2054ヒ 接合	
	459	61	2007	漆板	D S K3674		R W 44	246.0	56.0	30.0	アスナロ	遺物番号450ヒ接合	
	460	61	2008	被板	D S K3674		R W 21	245.0	79.0	32.5	スギ	遺物番号450ヒ接合	
156	461	61	2009	漆板	A S K3674		R W 20	222.0	127.5	22.0	スギ		
	462	61	2061	被板	A S K3674		R W 19	242.0	150.0	34.5	スギ		
	463	61	2092	漆板	D S K3674		R W 47	120.5	130.0	17.0	アスナロ		
157	464	61	2186	(漆柄)	S K3684		R W 60	底径66.0		4.5			
	465	62	2004	漆板	A S K3810	A B 4941	R W 146	200.0	88.0	16.0	アスナロ		
	466	62	2005	漆板	D S K3810 Y		R W 145	197.0	60.0	16.0	アスナロ		
158	467	62	2083	直	S K3835 Y			底径66.0					
	468	62	2031	木地素材	S X3840 F			111.0	高45.0				
	469	62	2032	木地素材	S X3840 F			1311.0	高48.5				
159	470	62	2059	木柱	S P3143		R W 142	170.0	105.0	111.0	クリ		
	471	62	2060	木柱	S P3161		R W 134	170.0	152.0	114.0	クリ		
	472	62	2077	木柱	S P3200		R W 136	136.0	28.0	15.0	ウニシ		
160	473	63	2076	油円錐状	S P3266 F			15.0	16.5	7.0		漆	
	474	63	2073	著	S P3566 Y			192.0	6.8	4.0			
	475	63	2012	漆板	A S P3663		R W 31	218.0	28.5	18.5	スギ		
161	476	63	2013	漆板	A S P3663		R W 33	250.0	148.0	28.0			
	477	63	2047	漆板	A S P3663		R W 32	254.5	115.0	38.0			
	478	63	2048	漆板	C S P3828	A B 4840	R W 152	261.5	171.5	79.0	スギ		
162	479	63	2118	漆柄	D区K3漆溝路				5.5		2直結合		
	480	63	2120	漆柄	D区K3漆溝路			底径80.0		6.0		3直接合	
	481	63	2121	漆柄	E S K1349 F	A B 4944		625.0	136.0	25.1			
163	482	63	2122	板	S D0269 F 2	A B 4952		623.5	135.5	40.5			
	483	63	2123	漆板	A S G0935 B	A B 4955		177.5	136.0	18.5			
	484	63	2124	漆板	B S K1353	A B 4743		178.0	48.5	23.0			
164	485	63	2125	不明加工品	S G0935 F 1	A B 4645		85.0	44.0	68.0			
	486	63	2126	漆柄	S G0935 F 4	A B 4644		156.0	65.0	5.5			
	487	63	2127	漆柄	S G0935 F 4	A B 4746		75.0	27.5	4.0			
165	488	63	2128	円錐	S G0935 F 3	A B 4746		47.5	21.5	7.0			
	489	63	2129	著	S D0269 F 2	A B 4953		98.0	8.5	5.0			
	490	63	2130	板	S D0269 F 2	A B 4154		167.0	6.0	5.0			
166	491	63	2131	漆柄	S D0269 F 2	A B 4154		167.5	21.0	5.0			
	492	63	2132	板	S D0269 F 3	A B 4255		330.0	253.0	9.0			
	493	63	2133	漆柄	S D0269 F 2	A B 4154		142.0	5.5	5.5			
167	494	63	2134	板	S D1362 F 1	A B 4356		170.0	106.0	8.0			
	495	63	2135	板	S D1362 F 1	A B 4356		186.0	28.0	11.0			
	496	63	2136	漆柄	S D1362 F 1	A B 4355		130.0	36.5	4.5			
168	497	63	2137	板	S D1362 F 2	A B 4357		158.5	19.0	24.5			
	498	63	2138	加L品	S D1362 F 1	A B 4356		40.0	21.5	19.5			

表4 木製品観察表(3)

採因番号	遺物番号	写真回数	整理番号	器種	板板 タイプ	出土位置	グリッド	登録番号	計測値()			樹種名	備考
									長さ	幅	厚さ		
				1035	棒	S K0251 F	A B3560		105.0	9.0	9.0		
				1037	礎板	E S K0313 F	A B4048		162.0	311.5	21.0		
				2003	礎板	B S K3611		R W86	185.0	173.5	29.0	スギ	
				2014	礎板	A S P3663		R W29	215.0	130.0	17.0	スギ	
				2015	礎板	A S P3663		R W28	213.0	84.0	15.0	ヒノキ科	
				2019	礎板	A S P3666		R W81	197.0	111.0	31.0	スギ	
				2020	礎板	A S P3666		R W80	182.0	97.0	25.0		
				2021	礎板	D S P3666		R W78	150.0	44.5	23.0	スギ	
				2022	礎板	D S P3666		R W79	154.5	99.0	21.0	スギ	
				2025	板	S K3662		R W57	153.0	128.0	23.0		
				2027	礎板	A S K3673		R W24	314.0	153.0	27.0	アスナロ	整理番号2094と 組合
				2028	礎板	D S K3673		R W23	345.3	119.0	21.0	アスナロ	
				2030-2	板	S K2962		R W140	104.3	22.0	7.0		
				2033	板	S K3663 F			131.0	135.0	39.0		
				2032	礎板	A S K3673		R W25	316.0	150.0	26.0		整理番号2027と 組合
				2035	板	S K3824 Y			339.0	131.0	44.5	スギ	
				2037	礎板	D S K3692		R W53	153.0	131.5	26.5	タリ	
				2038	礎板	E S K3673		R W27	316.5	113.0	28.5		
				2040	礎板	D S K3669		R W39	167.5	89.5	16.5	アスナロ	
				2041	礎板	D S K3669		R W40	165.0	169.0	20.0	アスナロ	
				2042	礎板	D S K3669		R W71	185.5	51.5	9.3	アスナロ	
				2044	板	S K3814			202.0	123.0	20.0		整理番号2049と 組合
				2046	礎板	A S P3663		R W30	220.3	136.0	20.2	スギ	
				2049	礎板	D S K3814	A B4941	R W148	201.0	50.5	25.0		整理番号2044と 組合
				2050	礎板	A S K3814	A B4941	R W147	178.0	88.0	11.0	スギ	
				2051	礎板	D S K3669		R W38	231.0	125.0	18.0		
				2052	礎板	D S K3669		R W42	136.0	65.0	16.0	スギ	
				2054	礎板	D S K3670		R W36	261.0	131.0	26.5		遺物番号458と組合
				2056	木柱	S K3628		R W22	262.0	119.5	101.0	タリ	
				2057	礎板	D S K3824		R W151	338.5	67.0	39.0	スギ	
				2058	木柱	S K3821		R W150	218.5	62.0	62.0	サクウ属	
				2062	礎板	D S K3673		R W26	312.0	55.0	26.0	アスナロ	
				2063	礎板	D S P3834		R W153	297.0	146.0	22.0	スギ	
				2064	礎板	D S K3669		R W41	369.0	70.0	20.0	スギ	
				2065	礎板	C S K3701		R W18	259.0	176.5	83.0	スギ	
				2066	礎板	D S K3814	A B4941	R W143	220.0	180.5	17.0	アスナロ	
				2067	板	S P3828 F			326.5	107.0	32.0	カブナ	
				2070-1	板	S K3493 Y			117.0	28.0	5.0		
				2070-4	署	S K3493 Y			234.0	7.0	5.0		
				2071	礎板	D S K3669		R W43	292.0	91.0	20.0	スギ	
				2072	板	S K3493 Y			223.0	119.0	18.5	タリ	
				2074	丸棒	S K3840			118.5	22.0	18.0		
				2078	角棒	S K3493 Y	A B4635		203.5	27.5	11.5		
				2081	板	S H2003		R W124	173.0	20.0	10.0	スギ	
				2084	小明	S K3835 Y			123.0	36.0	19.0		
				2087	礎板	D S K3819		R W149	366.0	171.0	105.0	スギ	
				2088	板	S K2862		R W132	423.0	158.0	13.0	スギ	
				2089	丸棒	S E3220		R W139	464.0	70.0	52.5		
				2090	角棒	S K2493	A B4635		357.5	17.0	10.0	スギ	
				2091	礎板	D S K3602		R W62	198.0	42.0	19.0	スギ	遺物番号445と組合
				2093	板	S K3430			104.0	46.0	10.5	ミツバチ科皮	
				2095	井戸棒	S E3220		R W138	48.0	20.5	3.0	スギ	
				2097	板	S K3495 Y			197.0	135.0	16.5	トチノキ	
				2098	板	S K3495 Y			329.5	96.0	21.0	ブナ属	
				2099	板	S G3216		R W126	147.0	75.0	5.0		
				2100	板	S G3216		R W127	102.0	12.5	7.0	スギ	
				2101	板	S G3216		R W123	59.0	45.5	9.5	スギ	
				2102	丸棒	S G3216		R W122	278.0	21.0	13.5	サナギ属	
				2103	板	S G3216		R W125	249.0	34.5	4.0		
				2106	板	S K3493 F 2			318.0	101.0	20.0	カブナ	
				2109	丸棒	S K3493 F 2			294.0	45.0	26.0		
				2110	板	S P3615 Y			114.0	148.0	21.0		
				2112	板	S P3566 F 2			163.0	189.0	33.0		

表4 木製品観察表(4)

検査番号	造物番号	写真図版	整理番号	器種	板厚 タイプ	出土位置	グリッド	登録番号	計測値()			樹種名	備考
									長さ	幅	厚さ		
			2114	板	S K3399 F				154.0	11.5	3.0	タケ葉科	
			2115	板	S K3399 F 1				87.8	101.0	11.0	スギ	
			2117	棒	D区東南				175.0	12.0	4.5		
			2119	角棒	S G3216 Y	A B 5036			77.8	35.0	32.0		
			2121	板	S D3836	A B 4740			240.0	34.0	12.0	コナラ属クヌ	
			2122	板	S D3801	A B 5040			179.0	23.0	2.0		
			2125	板	S K3426 F				71.0	29.5	9.5	クリ	
			2127	板	S K3664 F	A B 5037			201.0	15.0	1.7	アスナロ	
			2129	不明	S K3473				100.0	8.5	3.0	スギ	
			2130	板	S K3473				138.0	19.5	6.0	スギ	
			2131	板	S K3396				101.0	45.0	1.8	クリ	
			2132	板	S K3626	R W59			49.5	25.0	10.0	クリ	
			2133	板	S D3556	A B 4938	R W102		149.0	40.0	20.0	アスナロ	
			2134	角棒	S K3396 F				274.0	21.0	13.0	スギ	
			2136	小物	S D3556 Y				66.5	13.5	7.0	マツ属接ぎ合 束葉属	
			2137	板	S K2967				53.0	22.5	4.0	スギ	
			2138	板	S D3837	A B 4638			161.5	45.5	4.0		
			2140	丸棒	S D3837	A B 4638			117.0	23.0	20.0	ウツギ属	
			2141	棒	S H2003	A B 4830			264.0	29.0	18.0		
			2144	板	S K3607 S K3608		R W77		72.0	29.5	3.5	スギ	
			2145	板	S K3493				56.0	44.5	7.0		
			2147	棒	S K2890				99.0	9.5	3.0		
			2150	板	S K3494 Y				140.5	54.5	11.5		
			2151	小物	S K3678				59.0	24.0	6.5	スギ	
			2152	板	S K3493 F 1				87.0	69.0	9.5		
			2154	丸棒	S K3403 F 1				236.0	33.0	20.0		
			2155-1	角棒	S K3403 F 1				71.0	22.0	6.0		
			2155-2	角棒	S K3403 F 1				282.0	18.0	10.5		
			2156	板	S K3693 Y				157.0	36.0	12.0		
			2157	板	S K3347				73.0	51.0	13.5		
			2159	小物	S K2972 F	A B 4729			60.5	24.0	5.5		
			2161	板	S K3403 F				116.0	62.0	17.0	クリ	
			2162	丸棒	S K3403 F				62.5	28.0	19.0	カエデ属	
			2167	角棒	S K3577				124.5	36.0	5.0		
			2169	板	S E2567 Y				34.0	23.5	5.0		
			2170	板	S E2567 Y				141.0	20.0	2.0		
			2171	板	S E2567 Y				89.0	11.0	3.5	スギ	
			2173	板	S G3216 F 1	A B 4937			183.0	34.0	4.0		
			2174	板	S G3216 F 1	A B 4937			54.0	53.0	32.0		
			2175	板	S G3216 F 2	A B 5432			20.0	54.0	8.0	ネコ	
			2176	不明	S K3512 F 2				50.0	27.0	14.0	サワグルミ	
			2179-1	箸	S K3395 F	A B 4830			216.0	5.5	5.0		
			2179-2	箸	S K3395 F	A B 4830			159.0	6.5	4.0		
			2180	板	S K3293	A B 4632			65.0	32.5	23.5		
			2181	角棒	S K3293 F	A B 4632			182.5	58.5	59.0		
			2182	板	S K3444 F	A B 4934			200.0	37.5	7.0	モクレン属	
			2184	鍵板	A S D3804		R W144		222.5	126.0	24.0	スギ	
			2185	鍵板	B S K3626		R W48		225.0	32.5	31.0	スギ	
			2187	板	S X3001 F	A B 5230			396.0	56.0	28.0	ブナ属	
			2188	不明	S P3256				143.0	128.0	60.0	クリ	
			2189	板	S K3263 F				44.0	162.5	21.0	スギ	
			2190	板	S K3263 F				59.0	75.0	20.0		
			2191	丸棒	S K3495				470.0	60.0	53.0	ブナ属	
			2192	板	S K3495				448.0	235.0	30.0	ウルシ	
			2193	厚い板	D区東側道路				248.0	238.0	107.5	サワラ	
			2194	板	D区東側道路				230.0	91.0	24.5	スギ	

鍵板タイプ凡例

- A 一般的な長方形型
- B ほば正方形型
- C 立方体型 (厚みのあるタイプ)
- D 細長い物や不定形のタイプ
- E 30 以上の大型のタイプ

※整理番号の4桁目が年度年次、下3桁が実面番号を表す。

	総書用紙	非用紙
Aタイプ	10	19
B	4	3
C	3	1
D	9	19
E	5	3
計	31	36